

京都府埋蔵文化財情報

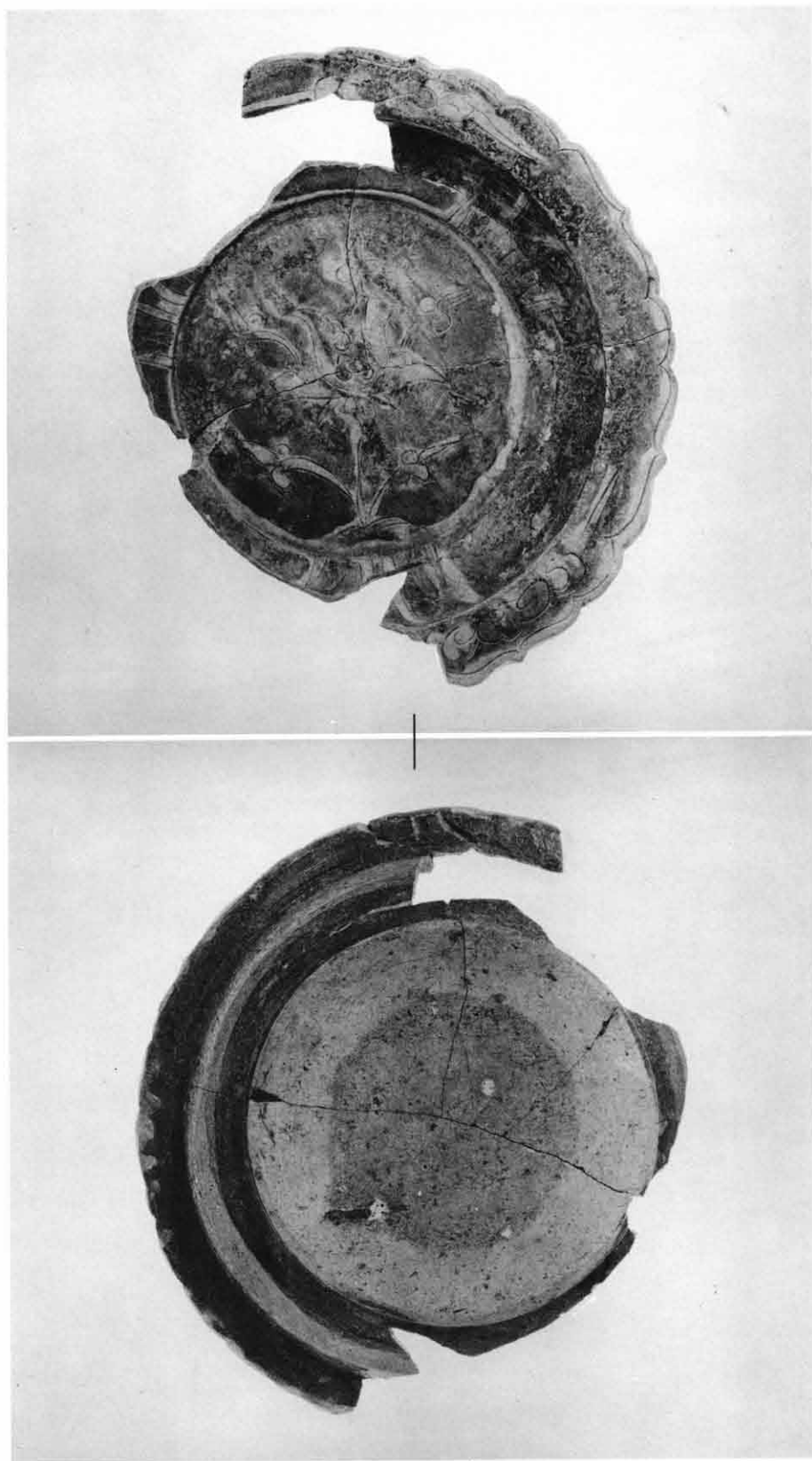
第 30 号

平安京跡(左京近衛・西洞院辻)の発掘調査	伊野 近富	1
休場古墳の発掘調査	森 正	9
私市円山古墳の発掘調査	鍋田 勇	15
—昭和63年度発掘調査略報—		25
4. アサバラ遺跡	7. 長岡京跡左京第202次	
5. 鳥取城跡	8. 木津遺跡第6次	
6. 福垣北古墳群		
資料紹介 高山古墳群(12号墳)出土の象嵌をもつ刀装具	増田 孝彦	38
府下遺跡紹介 42. 観音芝磨寺		41
長岡京跡調査だより		44
センターの動向		48
府下報告書等刊行状況一覧		50
受贈図書一覧		55

1988年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

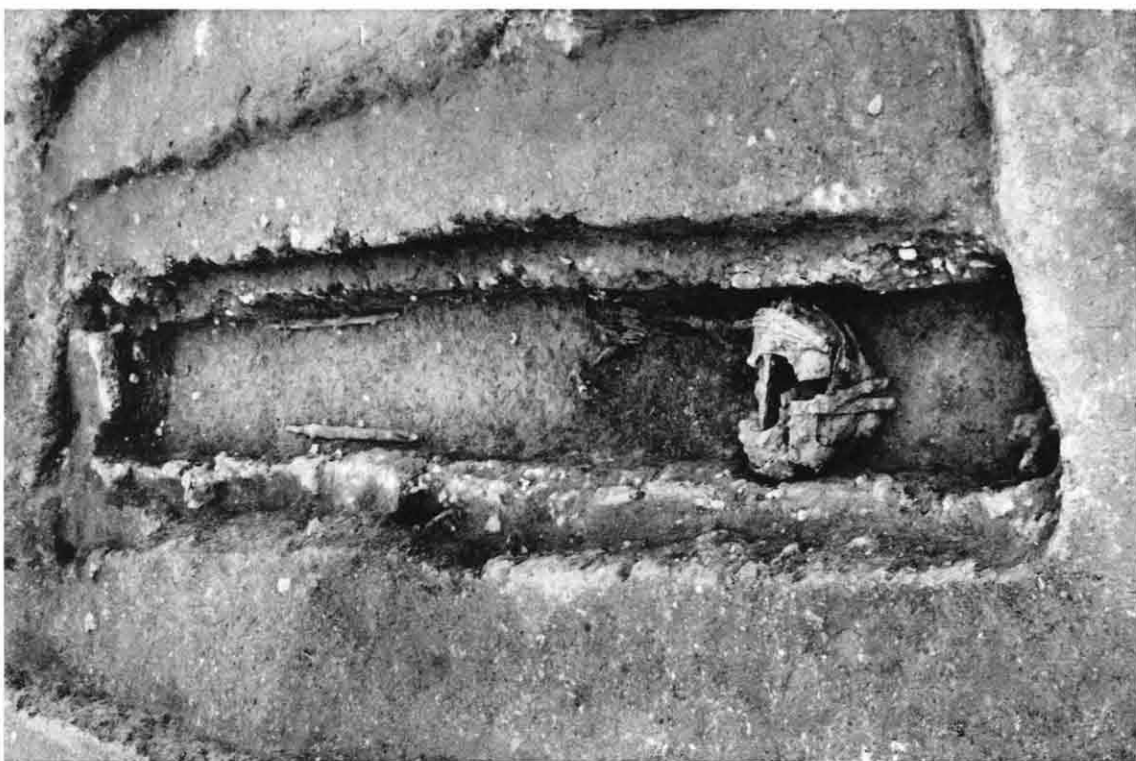
図版第1 平安京跡(左京近衛・西洞院辻)の発掘調査



華南三彩盤 上：表 下：裏



(2) 第2主体部 遺物出土状況 (西から)



(1) 第1主体部 遺物出土状況 (西から)

平安京跡(左京近衛・西洞院辻)の発掘調査

伊 野 近 富

1. はじめに

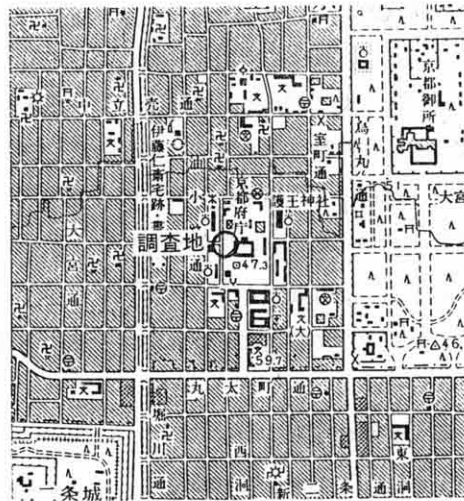
ここで紹介する発掘調査は、京都市上京区下立売通新町西入ル藪之内町にある京都府庁内で実施されたものである。調査前は駐車場であったが、この地に第2行政棟の建設計画がなされ、京都府総務部の依頼を受けて当調査研究センターが調査を実施した。調査面積は約1,500m²で、期間は昭和63年1月5日から同年8月11日まで行った。その結果、検出遺構163、出土遺物約400箱(整理箱)の成果があった。

以下はその略報である。

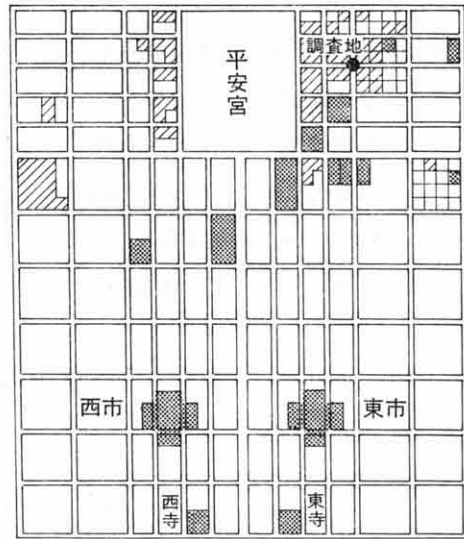
2. 歴史的環境(抄)

調査地は、平安時代に遡れば南北方向の道路である西洞院大路(幅8丈=約24m)と、東西方向の道路である近衛大路(幅10丈=約30m)の交差点(辻)に当たる。調査地のほとんどは、この路面と推定されているが、四隅に関しては交差点をとり巻く四つの町の一部であった。四つの町とは平安時代の条坊表示で言えば、西北が左京一条二坊十五町、西南が同十四町、東北が左京一条三坊二町、東南が同三町に相当する。

この付近は官衙町がひしめいていたところ(注1)で、『京都の歴史』によれば、西北が左



第1図 調査地位置図 (1/25,000)



第2図 平安京条坊図

近町、西南が左獄、東北が右衛門府(町)、東南が修理職町であった。官衙町とは、宮域の内外にあるさまざまな官庁に出仕する下級役人たちが起居し、生活する^(注2)地域であり、ほとんどは平安宮とともに平安時代で解体してしまった。

中世には付近に下御霊神社があったが、天正18(1590)年に豊臣秀吉の都市改造によって移転したという。

江戸時代になると調査地の西北隣に茶屋四郎次郎屋敷が造られた。昭和59年度の(財)京都市埋蔵文化財研究所が実施した調査^(注3)では、多種多様でしかも豪華な遺物が出土し、豪商の生活の一端が明らかにされた。

江戸時代の末期には、会津藩主松平容保が京都守護職に任じられたが、それに伴って、現京都府庁敷地一帯を幕府は買収し、その役邸にあてた。慶応3(1867)年に守護職が廃止され、跡地は一時京都裁判所に引き継がれたが、明治2(1869)年京都府庁、同4年京都中学校、同18年に再び府庁の地^(注4)となり、現在に至っている。

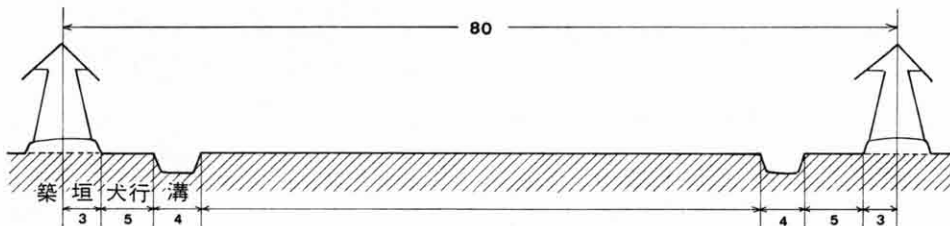
以上のような変遷が知られているが、今回の発掘調査によって新たな事実が多数確認された。本文では特に道路と町の変遷に注目して記述したい。

3. 道路の変遷

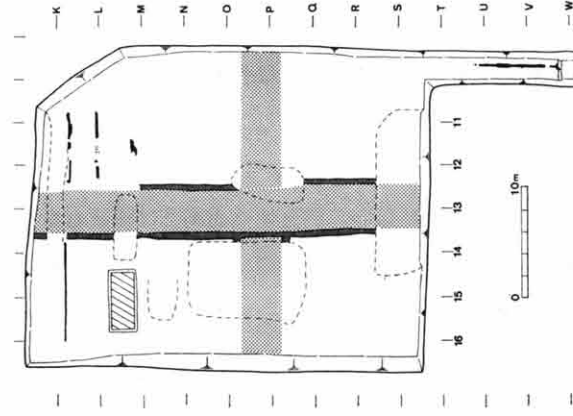
かつて広さを誇った道路は、徐々に縮小し現在の通りとなることが判明した。

平安時代には、西洞院大路の場合幅^(注5)8丈(約24m)であったことは前述したが、その幅は両側にある築垣の心々距離を示したもので、第3図のように、側溝などを除いた路面は56尺(約16.7m)である。残念ながら平安京時代の遺構面はほとんど遺存していなかったが、西北の部分は確認することができた。それによると、最近の復原案と大きな相違はない。

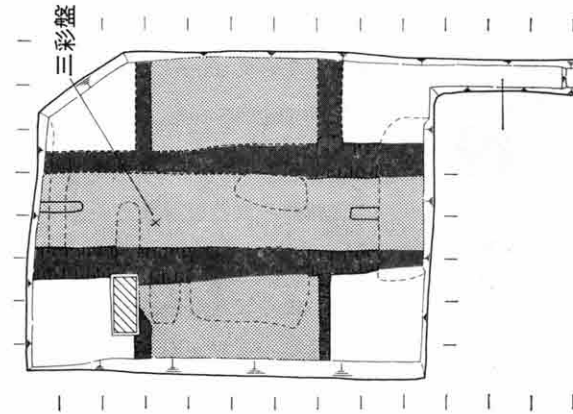
明確に路面がわかったのは室町時代である。調査地南部で確認した路面は6.6mであった。その両側に溝があったが、東側に関しては後世の攪乱により不明確だが、近衛大路以南にのみ幅約3.4mの規模で検出できた。西側溝に関しては、近衛大路とも分断して調査地の端々まで検出できた。幅は近衛大路以北が約3.1mで、同以南が約2.4mであった。側



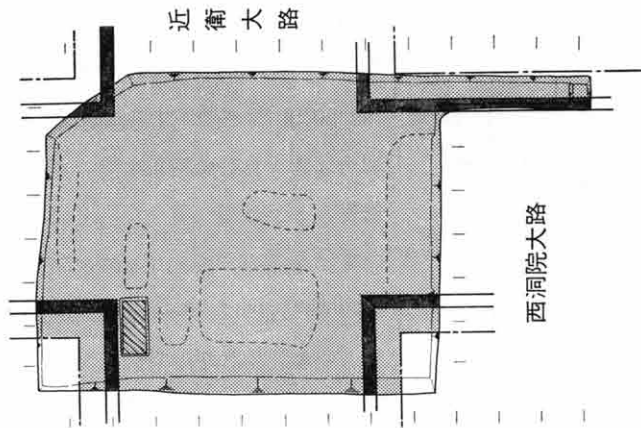
第3図 西洞院大路の断面概念図



江戸時代



室町時代



平安時代
(推定)

第4図 調査地変遷図

溝というより堀といった方がふさわしく、防御用の施設であっただろう。

かまえ
構

応仁・文明の乱に際し、洛中・洛外の住人は自衛のための施設を構築した。それが構と呼ばれるものである。形状は町の外に堀を掘り、内側に柵などを設けたもので、上記の側溝はその一例となろう。溝の幅の相違を考えれば、近衛大路を境として南北の町内は別々の構の堀を掘っていたといえる。なお、調査地の西南部は前述したとおり左獄がおかれていたが、天正13(1585)年豊臣秀吉が獄舎を西洞院油小路あたりに移したという。したがって、室町時代には獄が機能していたわけで、今回検出した左獄の東を限る幅約2.4mの溝や、北を限る幅1.2mの溝は、別な意味での防衛機能を備えていたともいえる。

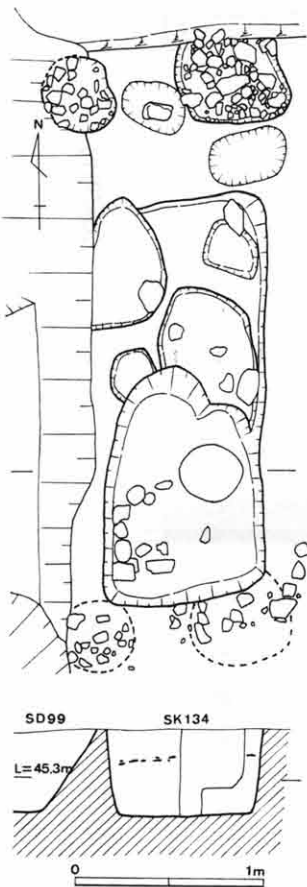
それに対して、調査地の西北部は完全なる構といえようか。東を限る溝は幅約3.1m、南のそれは約1.9mであった。ここで注目すべきなのは、交差点のコーナーから北へ約4mの

地点で、溝の底が浅く掘り残されていたことである。検出面から約40cmしか掘られていず、そのすぐ北の深さは約1mであった。これは意図的で、京都の地形が北に高く南に低いことを念頭におけば、北から流れる水を溜めるための設備といえよう。常時水を溜めることによって、防御機能をいっそう高めたのであろう。では、浅くなった地点は防備に支障があるのではないかと疑問が生じるが、そのすぐ東側にある構造物によって、それは解消できる。

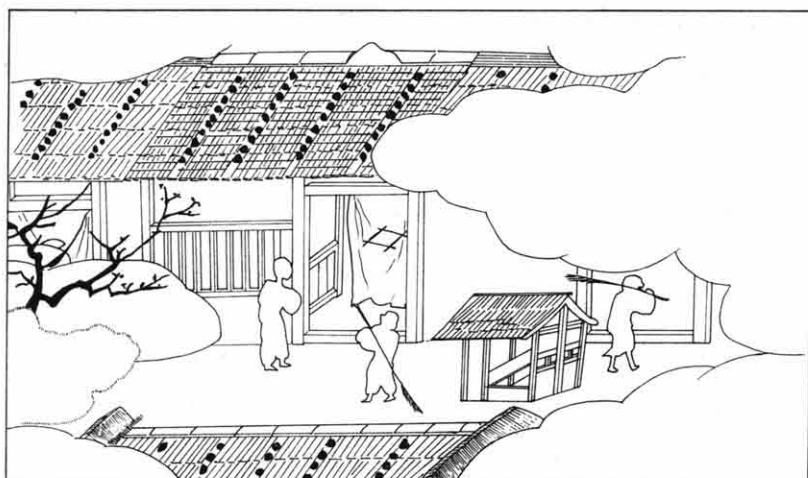
公衆便所

室町時代の路面を掘ってゆくと、その西端で隅丸方形の土坑(SK134)が確認できた。第5図のとおり、東西約80cmで、南北約130cm、深さ約50cmの規模がある。埋土は炭を含む黄褐色土で、土坑の壁は黄色味のある物質がこびりついていた。土坑は新旧2時期あり、古い方は重複して北に1.1mのびていた。これらの土坑の四隅付近には、5~6cm大の円礫が30cm範囲に置かれていた。これが、おそらく柱の位置を示す円礫であるので、ここに細長い建築物があったことになり、土坑はその中にすっぽり収まっていた。

簡単な建物で、その中に土坑が必要なのは便所がも



第5図 SK134実測図



第6図 洛中洛外図にみる便所(注7文献から改変トレース)

とも可能性が高く、壁の変色からみてもほぼ間違いない。前述したように防備に若干不安がある個所には、このような建物で遮蔽していたのである。

本来、公共の場である路面に便所を設置することは、これが公共の役割りを担っていた証拠といえる。つまり、公衆便所の性格を有していたと推定できよう。この遺構は道路が縮小された時点で廃棄されており、遺物から16世紀末といえる。

当時の状況を見聞した宣教師ルイス・フロイスの『日欧文化比較^(注6)』には「われわれの便所は家の後の、人目につかない所にある。彼らのは、家の前にあって、すべての人に開放されている。」と書かれており、今回発掘されたものは、これを実証したといえる。フロイスは「日本では(中略)、人糞を菜園に投ずる」とあり、糞尿を取り去る人が「それを買ひ、米と金を支払う」と書いている。今回の遺構は、設置個所や構との関連で考えると、調査地西北部の町共同体が管理したと推定でき、高橋康夫氏^(注7)が推論しているように、「し尿を近郊村落の農民に売り、代金を町入用費に繰り込んで、町の運営活動に役立てた」のだろう。公衆便所遺構の発見は、16世紀末の町共同体のあり方の一端を知る上で、貴重な資料となったのである。

江戸時代になると、道幅は狭くなり、5~6m程度となる。また、広い溝は埋められて幅30cmほどの石組みの側溝に変化してしまう。では、項を改めて安土・桃山時代以降の町の変遷を中心に記述したい。

4. 町の変遷

歴史的環境の項で記述したとおり、平安時代は官衙町の一帯であった。遺物からみれば

平安時代後期から室町時代の前半までは、あまり多くなく、多数の人々が居住した形跡はない。この地が活気を帯びてくるのは応仁・文明の乱以後である。特に16世紀末は盛況を呈する。

金箔瓦

調査地の東南部で、金箔瓦約100点を含む瓦溜りを発見した。堆積した瓦を除去してゆくと、その直下に整地をした固い面と4個の礎石が現われ、その配列から東西方向の細長い建物があったことが判明した。金箔瓦の文様は桐文で、箔のあり方から豊臣秀吉の聚楽第造営時と推定できる。したがって、この小規模な建物は聚楽第建設に応じて周辺に建設された大名屋敷の一面をなすものであろう。

近年の周辺での発掘調査によって金箔瓦出土地点が増加している。左京内膳町跡(現平安会館)、そのすぐ北側である平安京左京北辺三坊五町(現京都府立府民ホールアルティ)、聚楽第東方の平安京左京北辺二坊などは、いずれも中立売通沿いで、この通りを中心に二条以北に大名屋敷が点々と造営されていたことが確実となった。金箔瓦の出土は、安土・桃山時代の大名屋敷の存在地点を端的に知る上で格好の資料であり、文献史料を加味すれば、当時の市中の変貌振りを復原することができよう。

聚楽第は文禄4(1595)年に秀吉自ら破壊するが、周辺の屋敷も急速に姿を消したようである。今回の資料もその一例となるだろう。

なお、この瓦溜りと重複した北側で、墓と思われる遺構を確認した。出土遺物は数片の骨片(火葬骨か)と、骨角製のサイコロ1点、鉄製ナタの刃1点である。サイコロの内部は球形に割り抜かれていた。

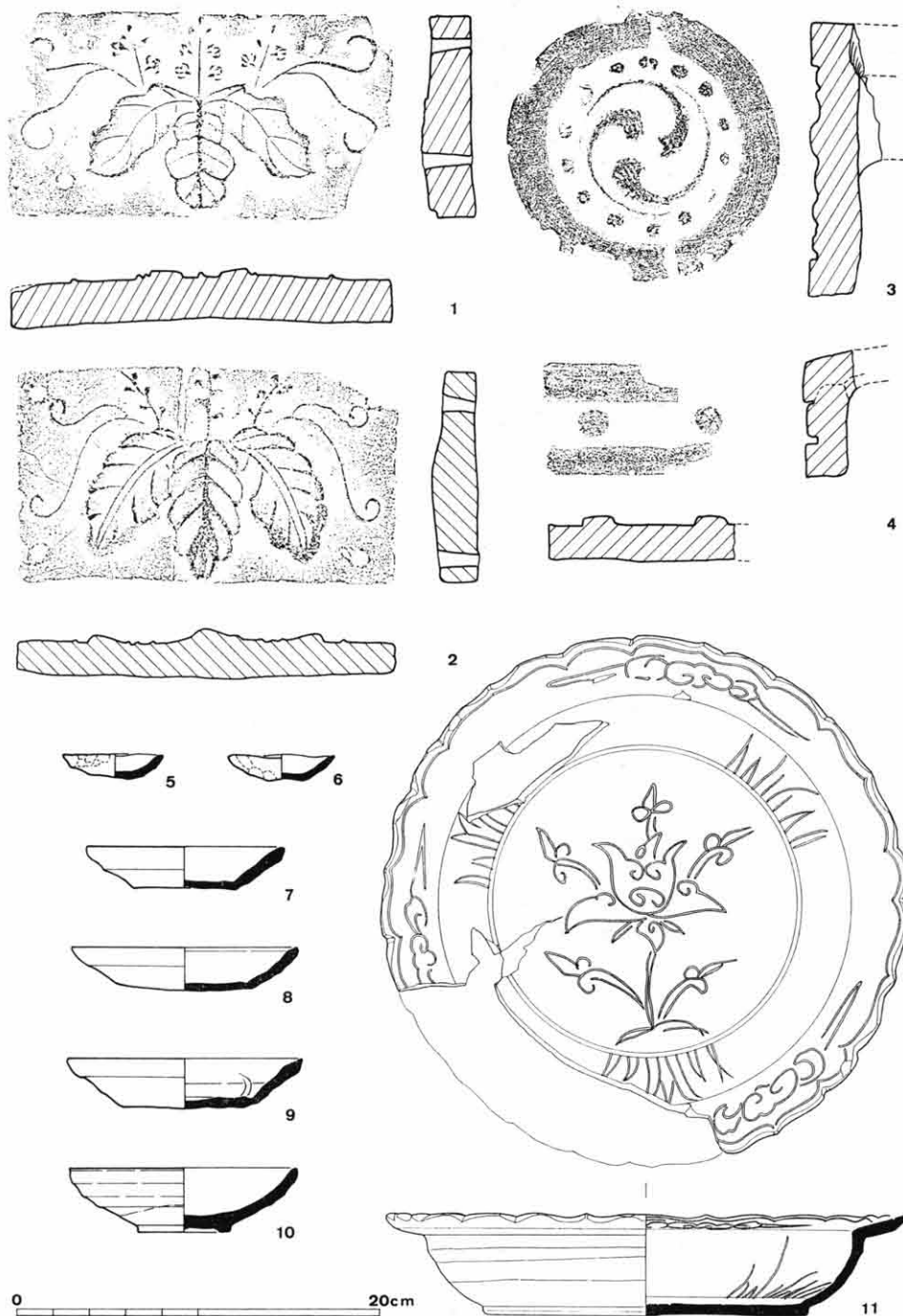
華南三彩盤

江戸時代初期になると、道路は盛土して整地するが、この時に交差点の北部で土坑を掘って土器の埋納行為を行っている。その中には中国製華南(あるいは交趾)三彩盤1点を始め、土師器鍋1点、美濃・瀬戸天目茶碗片や多数の土師器皿を埋納していた。この内、華南三彩盤は、日本で出土した中でもっとも遺存のよいものである。内面は緑を基調に褐色と黄色で彩られており、外底面は露胎で、褐色味のあるザラザラした胎土である。口縁部はへらで成形され輪花を呈している。内底面は一本の花がへらで描かれている。

この類例は、京都や堺といった当時の都市でかなり出土しているが、他は戦国大名の城などであり、分布は片寄っており、有力町人層や大名クラスの持ち物であった。

町の構造

道路とその周辺は、江戸時代だけで3度ほど改修されており、徐々に盛土され土地が高くなっている。その理由は加茂川の氾濫と大火災後の盛土がある。



第7図 出土遺物実測図

SX104 : 1~4, 1・2. 金箔方形飾り瓦, 3. 金箔軒丸瓦, 4. 金箔軒平瓦
 SK22 : 5~11, 5~9. 土師器皿, 10. 唐津皿, 11. 華南三彩盤

今回の調査地内では、江戸時代だけで5度の洪水と2度の大火災跡を認めることができた。火災層は天明8(1788)年と安政元(1854)年に対応しよう。洪水層は2度の火災層の間に収まるのが4層で、安政の大火以後が1層ある。この時期に調査地内で注目すべき遺構には漆喰溝がある。これは井戸からの排水を流すためのものであり、台所など水を使う作業場に設備された。東北部で砥石が10点近く出土したことは、これを追証するものとなった。火災後は、道路を含めて盛土されていることから、都市計画といったものがあり、その中で都市再生が行われたのだろう。

5. おわりに

今回の発掘調査によって道路や町の変遷が明らかとなった。それ以外に個々の遺物や遺構のトピックスがたくさんあったが、ここでは以上で止めたい。今後整理作業を進めて後日報告したい。 (いの・ちかとも=当センター調査第2課調査第3係調査員)

注1 「第3章 平安京の形成」(『京都の歴史』 第1巻, 京都市編) 1970

注2 「上京区概説」(『史料 京都の歴史』 7, 京都市編) 1980

注3 平尾政幸・本弥八郎「平安京左京一条二坊」(『昭和59年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人 京都市埋蔵文化財研究所) 1987

注4 「上京区 藪之内町」(『京都市の地名』 平凡社) 1979

注5 平安京の造管尺については、財団法人 京都市埋蔵文化財研究所の成果があり、昭和63年1月末現在では、1丈=2.984858m±0.000372mである。

辻 純一「平安京の条坊復原」(『京都府埋蔵文化財情報』 第27号, 財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注6 『大航海時代叢書11』 天正13(1585)年の記述による。

注7 高橋康夫『洛中洛外一環境文化の中世史』 1988

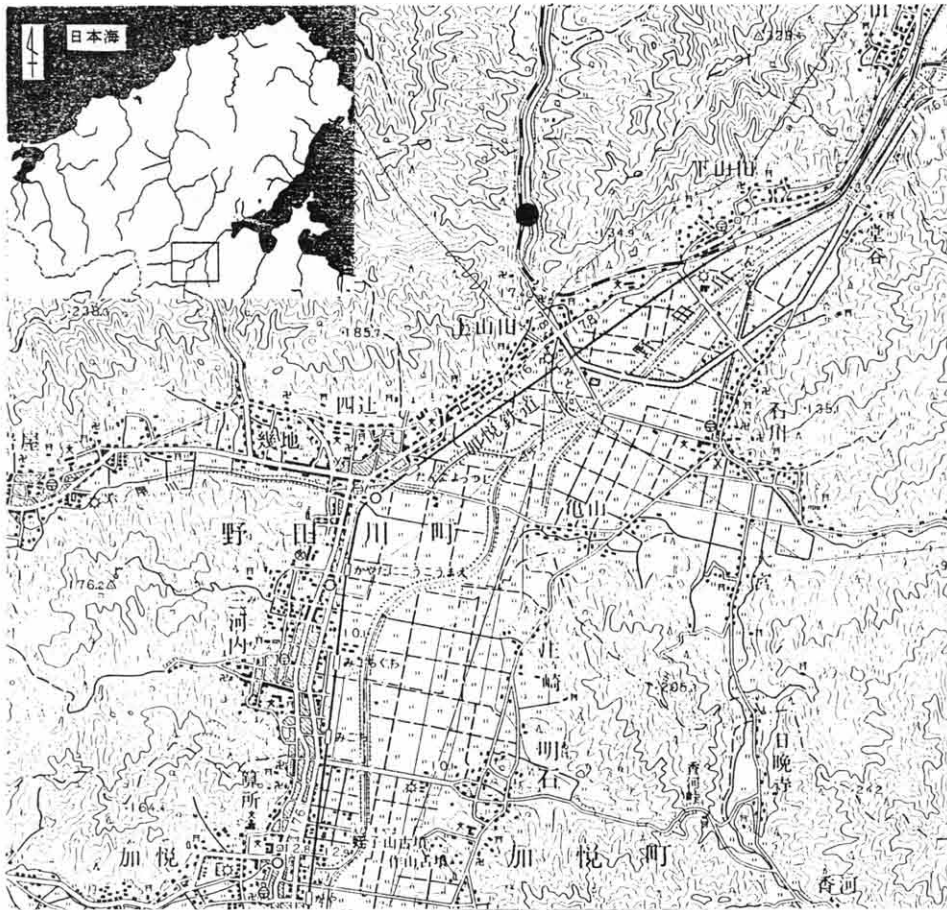
休場古墳の発掘調査

森 正

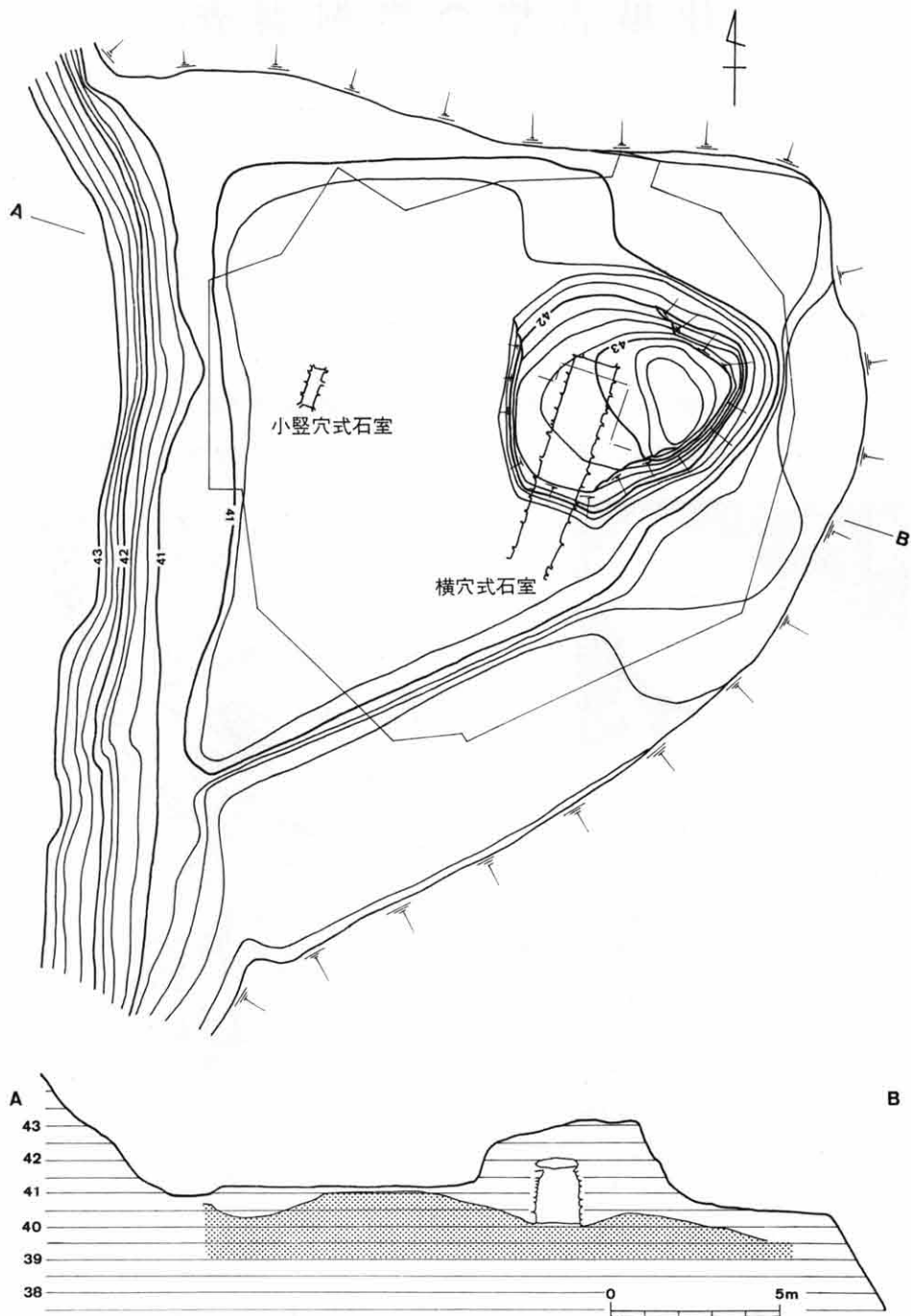
1. はじめに

今回の発掘調査は、一般国道312号の道路新設改良事業に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。現地調査は、昭和63年7月18日から同年9月14日にわたり実施した。

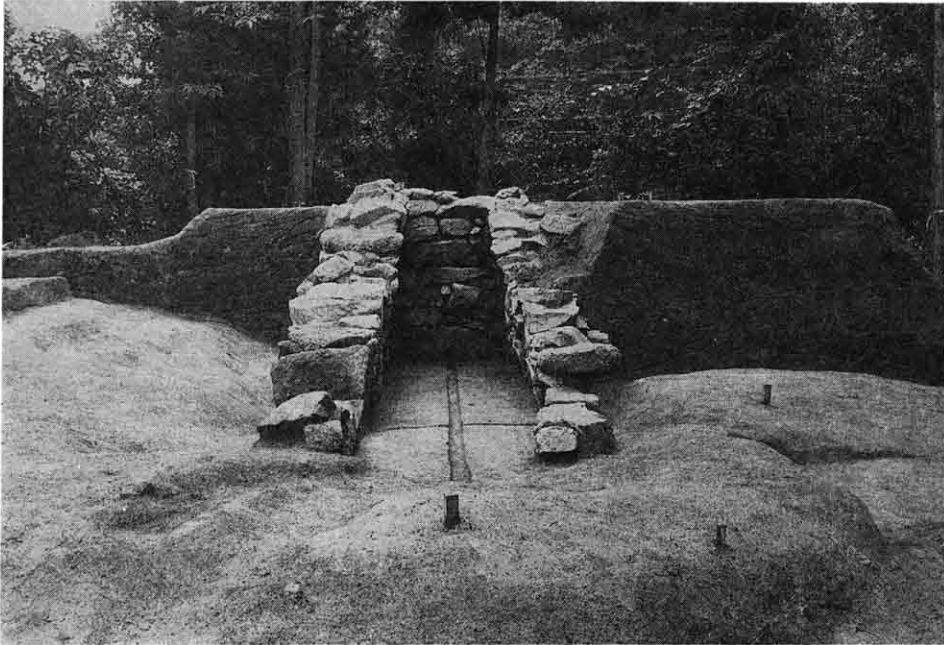
休場古墳は、京都府与謝郡野田川町大字上山田小字休場に所在する。本古墳の立地は、野田川町から大宮町三重へ通じる水戸谷峠と呼ばれる、狭い谷筋に面する急峻な丘陵の先



第1図 調査地位置図 (1/30,000)



第2図 地形測量図



第3図 横穴式石室及び墳丘築成状況(南から)

端部にあり、古墳東側の急な斜面下には、野田川に注ぎ込む水戸川が流れている。

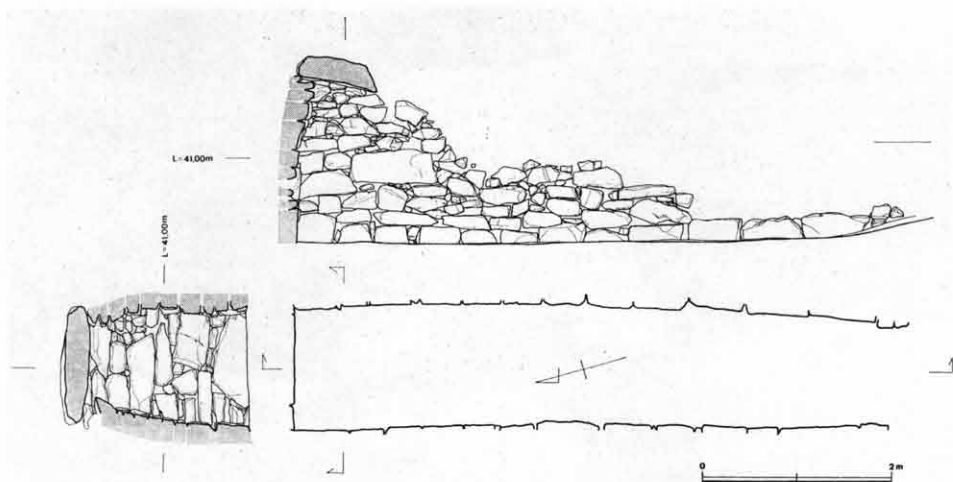
調査前には、直径約9m・高さ2m程度でやや東西に長い不正円形の高まりが確認されており、やや小規模ながらも、墳丘の一部であると予想された。調査の結果、埋葬施設として横穴式石室及び小竪立式石室を検出した。

以下、現在整理作業を進めている途中ではあるが、今回の調査の概要を記す。

2. 調査概要

(1) 墳丘

当初確認していた高まりは、予想されたように、墳丘の一部であった。後世の開墾及び、植林などによって周囲を削平されており、特に西側では幅約7mにわたり平坦な地形となっているなど、旧状をよく留めていなかった。しかし、石室の上部及び周囲では、比較的よく残っており、幅数cm程度の土が互層となり細かく盛土されている状況が観察できた。墳丘の基底については、尾根高位である西側において馬てい形を呈する溝を掘削し、裾部の造成を行っている。溝は、検出面での幅約3m・深さ0.7cmを測るが、南・北側では消滅する。溝の基底と石室中軸線の距離を半径として、折り返すと直径約17mの円墳と考えられる。その際、東側裾部は、原状ではがけ面となっているが、これは盛土土層から見てもすでに崩れて流失してしまったものと判断できる。墳丘高は、西側溝の基底から、残存墳丘



第4図 横穴式石室実測図

の最高部までのレベル差が約3mとなり、ほぼもとの墳丘高を示していると考えてよからう。

(2) 埋葬施設

a. 横穴式石室

石室は、墳丘のほぼ中央に位置し、南に向かい開口する。規模は、全長6.5m・奥壁部幅1.3m・羨門部幅1.0m・高さ1.7mを測り、無袖式の平面プランを呈する。残存状況は比較的良好であり、奥壁部では天井石が1石架構されて残っていた。両側壁は、奥壁側ではほぼ完存するが、羨道部ではすでに石材が抜き取られており、基底石のみ残っていた。石積みは、基底石に大きさ・形のそろった石材を縦位に用い、その上に奥行きのある平たい石材を横積みし、壁面を構成している。石材は概して小さく、壁面での大きさが、長さ30～40cm・幅10～15cm程度のものが大半を占める。ただ、奥行きのある石材で、さらに控え積みの石材を数多くかませるため、壁面は崩れにくくなっている。天井石も、長さ約70cmと小さくなく、同様な石材を使用していたとすれば6石ないし7石が架構されていたと考えられる。また、各壁面とも5ないし6段目から、ほぼ同レベルで内傾気味に持ち送りをを行う。石室の掘形は、それほど深く掘り込まれておらず、石室構築にあたっての平坦面を確保する程度に地山面を削り込んでいる。床面は、ほぼ水平であるが、羨門部付近においては、傾斜をつけ高くなっている。

b. 小竪穴式石室

石室は、横穴式石室中軸線から約8m西に離れた位置にあり、その主軸は横穴式石室とほぼ平行にとって築かれている。墓壙は、墳丘を造成する際の溝内の地山面から掘り込ま

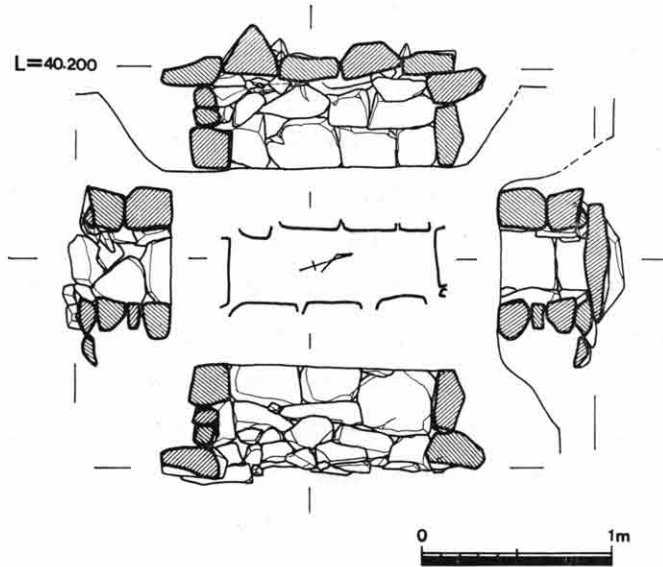
れており、長辺2.2m・短辺1.4mの隅丸長方形を呈する。

石室の構造は、基底石を縦位に置いた後、上段を積み上げている。各壁とも石積みは、2段を原則とし、部位によっては3段ないし4段をほぼ垂直に積み上げ、4石の天井石を架構している。石材は、横穴式石室と同様、花崗岩の自然石を用いている。石室規模は、床面プランで長辺1.1m・短辺0.4mを測り、高さは約0.5mである。副葬品としては、鉄製刀子が1点、東壁沿いで床面から約5cm浮いた状態で出土しているのみである。

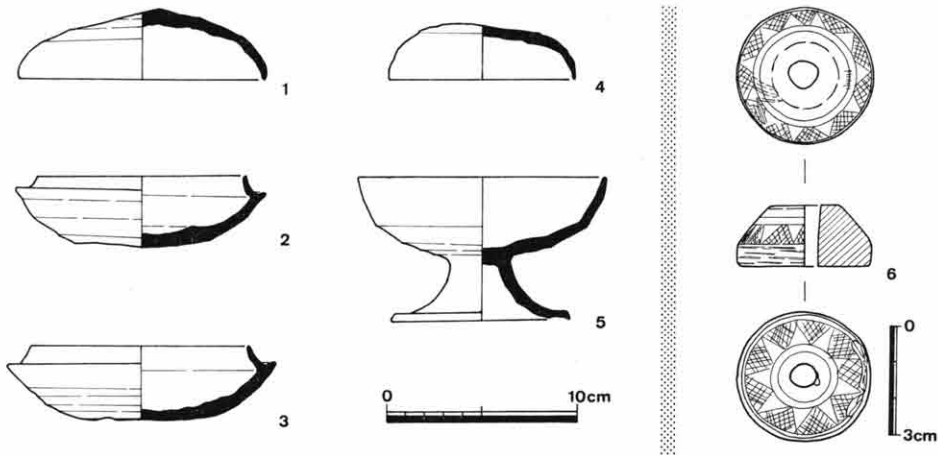
3. 出土遺物

横穴式石室からは主なものとして、須恵器(約30点)・鉄製刀子(5点)・鉄鏃・滑石製紡錘車(1点)・玉類が出土している。

須恵器には、蓋杯・高杯・甕・平瓶等の器種がある。この中で杯類をみると、蓋杯(1・2・3)と、杯蓋(4)では前者に古相を認めることができ、少



第5図 小竪穴式石室実測図



第6図 出土遺物実測図

なくとも2型式を設定し得る。さらに、出土状況からみても少なくとも2時期に分けることができ、土器の示す型式差と対応する。これらを陶邑古窯址群の編年に対応させると、前者はTK209、後者はTK217型式^(注1)に併行するものとして大過ない。

4. ま と め

以上、今回の休場古墳の発掘調査の成果を列挙しまとめとする。

本古墳は、直径約17m・高さ約3mを測る円墳であり、横穴式石室及び墳丘裾部に位置する小竪穴式石室を埋葬施設とする。

横穴式石室は、当初の予想以上に残存状態がよく、南に開口する、無袖式の平面プランを呈することがわかった。羨道部では、基底石以外の石材は抜き取られていたが、床面に及ぶ攪乱は行われておらず、石室内の床面はほぼ旧状をとどめているものと考えられた。

築造時期については、床面出土の須恵器からみて、6世紀末頃になると考えており、7世紀中頃までに少なくとも1度は追葬^(注2)が行われている。

小竪穴式石室は、横穴式石室と同一墳丘内にあり、その被葬者との密接な関係がうかがわれる。横穴式石室墳の周辺埋葬施設という点で、特に注意される事例である。築造時期については、出土遺物に乏しく即断し難いが、墳丘造成のための溝内の地山面から墓壙が掘り込まれている点、石室主軸が横穴式石室のそれと並行する点等からして、横穴式石室の築造後に築造されたものと判断しておく。

(もり・ただし=当センター調査第2課調査第1係調査員)

注1 田辺昭三「陶邑古窯址群1」(平安学園考古学クラブ) 1966

注2 古相を示す一群の須恵器については、その出土状況からみてさらに1ないし2度にわたる追葬を想定することも可能である。

私市円山古墳の発掘調査

鍋 田 勇

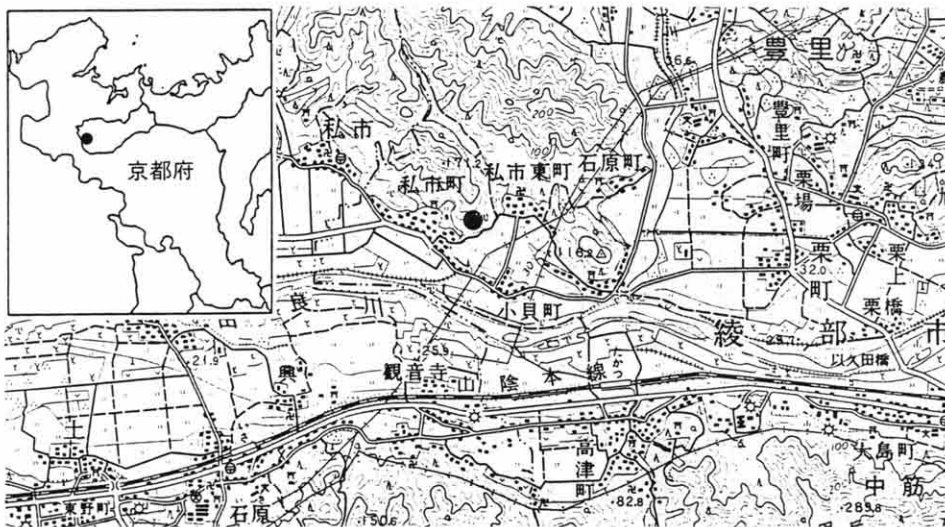
1. はじめに

当調査研究センターは、日本道路公団の計画する近畿自動車道舞鶴線の建設に先立ち、同大阪建設局の依頼を受けて道路の予定路線内に所在する円山城館跡(私市円山古墳)の発掘調査を昭和62年度に行った。その結果、以下の調査成果を得るに至った。

- ① 城館にとまなう明確な遺構・遺物は確認できない。
 - ② 丘陵の頂部には、鎌倉時代の経塚(私市円山経塚)・石組等が営まれている。
 - ③ 丘陵の頂部には、造り出しを有する大型円墳(私市円山古墳)が築造されている。
- ②の経塚等については、昭和62年度に調査を終了したが、古墳については、今年度も調査を継続して行った。今回は、現時点における古墳の調査結果を写真解説により速報として掲載する。

2. 古墳の位置

私市円山古墳は、京都府綾部市私市町円山に所在する。古墳は、いわゆる由良川中流域の中央部に位置しており、平野部へのびた丘陵先端の頂部に築造されている(第1図)。



第1図 私市円山古墳位置図(1/50,000)

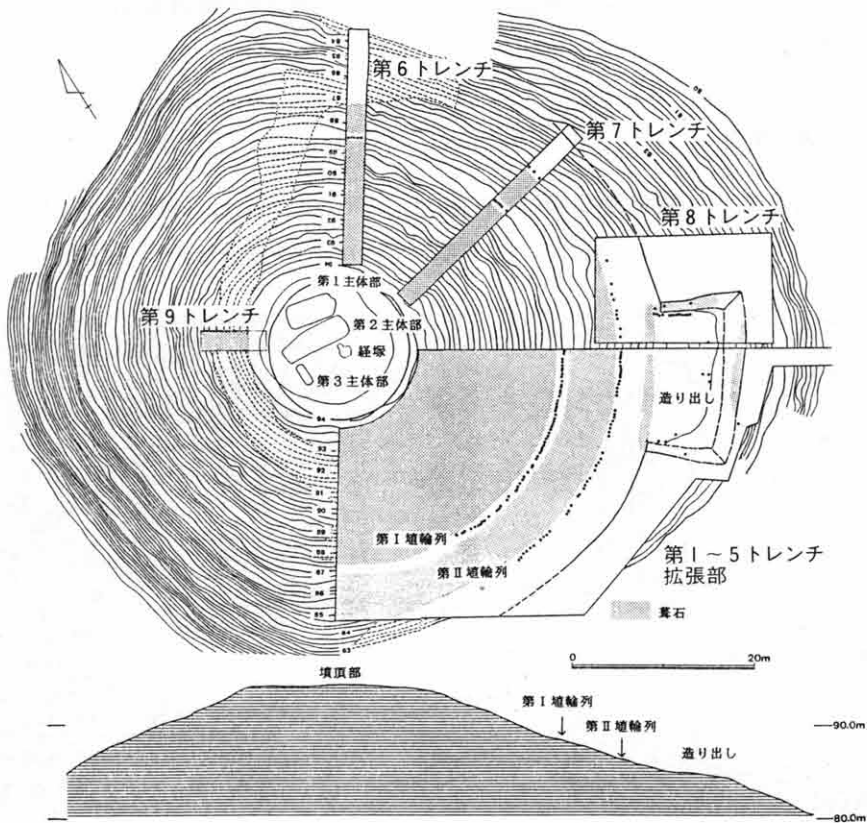
3. 墳丘の調査

私市円山古墳は、造り出しを有する大型の円墳である。墳丘の規模は、円丘部の直径71m、造り出し部の長さ10m・幅18m、全長81m・高さ10mを測る。

墳丘は、2つの平坦面を有する3段築成であり、それぞれの平坦面には、埴輪列が樹立されている。円丘部の2・3段目斜面及び造り出しには、主として由良川の河原石を使った葺石が葺かれている。



写真1 私市円山古墳遠景(南から)



第2図 トレンチ配置及び検出遺構図



写真2 墳丘全景(南から)

写真2は、墳丘の全景である。写真右側手前が造り出し部であり、ここからは、円筒埴輪列を検出したほか、家形・短甲形・盾形等の形象埴輪や土師器が出土している。

墳丘は、3段に築造されているが、墳頂部付近を除いて、ほとんどが地山を成形して形造られている。



写真3 第I埴輪列(北東から)

墳丘南側の第I埴輪列の検出状況である。この段階では、埴輪・葦石とも検出途中である。埴輪列は、葦石の基底石から約80cmの間隔をおいて並べられている。

埴輪列には、円筒埴輪のほか、数本の間隔をおいて、朝顔形埴輪が樹立されている。

背景は、福知山盆地の一部である。



写真4 第6トレンチ全景(北東から)

墳丘の北側斜面に設定した第6トレンチの全景である。写真手前の埴輪は、第I埴輪列であり、各埴輪がほぼ接するように樹立されているのがわかる。最も左側の埴輪は、須恵質であり、他は、土師質である。

このトレンチでは、葦石の遺存状況が比較的良好であり、築造当初のようすを窺うことができる。

4. 主体部の調査

主体部は、墳頂部のみにおいて、計3基を検出した。これらを便宜的に第1～3主体部とし、以下の解説を行う。

各主体部の配置は、第1・2主体部がともに長軸を東西方向にとり、併置しているが、第3主体部は、南北に長軸をとり、墳頂部の西隅に位置している(写真5)。各主体部の構造は、いずれも土壌内に木棺を直葬するものであるが、第1・2主体部は、粘土を使用しており、粘土槨を意識した構造が採用されている。

第1主体部は、2段墓壇のなかに組合せ式の木棺を安置し、小石を混ぜた粘土で被覆した構造をもつ。被覆粘土上からは、土師器片が、墓壇埋土内から埴輪片が出土している。遺物の多くは、棺の西側にまとまっており、ここからは、冑・頸甲・肩甲・短甲・草摺のセット・鉄鏃・胡籙・鏡・玉類(勾玉・管玉・小玉)・堅櫛等が出土した。また、棺の東側からは、鉄剣が出土している。

第2主体部は、墳頂部のほぼ中央部に位置する中心主体であり、第1主体部と同様に、2段墓壇内に組合せ式の木棺を安置する。粘土で棺を被覆するが、棺の上面中央部には粘土が存在しなかった(写真6)。遺物は、冑・鏃・短甲・鏡・鉄刀・鉄鏃・ミニチュア農具類・玉類(勾玉・管玉・小玉・白玉)・堅櫛等が出土している。

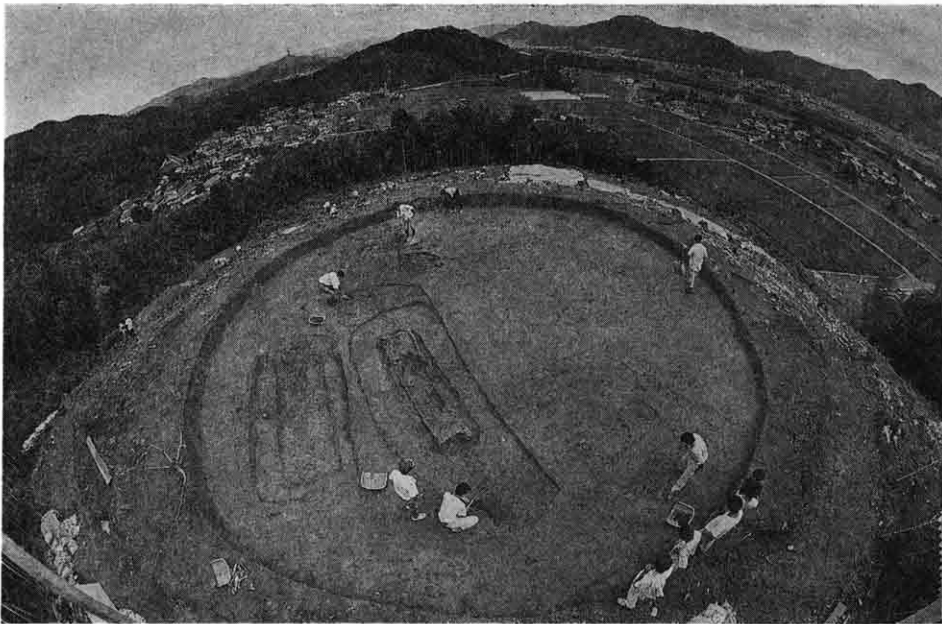


写真5 墳頂部全景(北西から) 16mmレンズで撮影

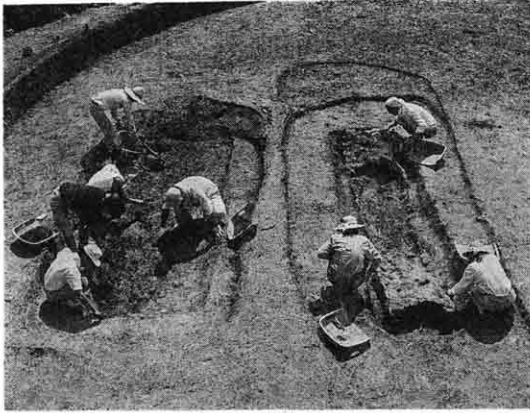


写真6 第1・2主体部掘削状況

左が第1主体部、右が第2主体部である。主軸は、ほぼ東西を通る。第1主体部は、棺の輪郭を検出しているところである。第2主体部は、棺の両端を被覆していた粘土の検出作業である。検出後の墓壇の形状は、第1主体部が、長さ5.6m・幅2.7m、第2主体部が長さ7.6m・幅2.7mで、ともに2段に掘り込む隅丸長方形であった。

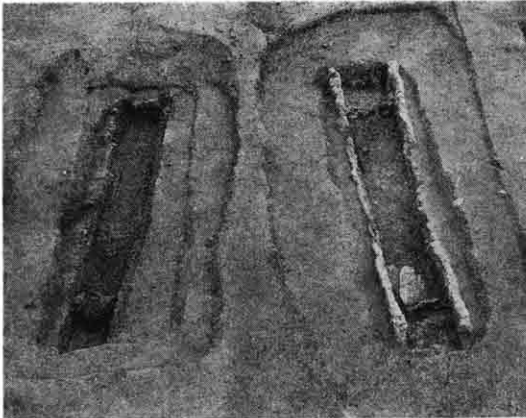


写真7 第1・2主体部遺物出土状況

第1主体部は、組合式木棺が安置されていた。棺は、粘土と礫で一部被覆されていたが、底に粘土は敷かれていなかった。棺内中央付近に鉄剣、西木口付近に頸甲・肩甲・短甲が見える。第2主体部も組合式木棺であり、粘土で一部被覆されていた。棺内東木口付近に鉄刀2本と鏡、西木口付近に鉄刀・短甲・ミニチュア農工具類が見える。



写真8 現地説明会風景

現地説明会は、昭和63年9月11日に行い、約1,000人の見学者が訪れた。

各主体部は、遺物を取り上げた直後の状態である。主体部の奥と右手(西・南側)に見えるトレンチで、下層の調査を行い、その結果、主体部の検出面から約0.3~1.0m下層で地山を確認した。

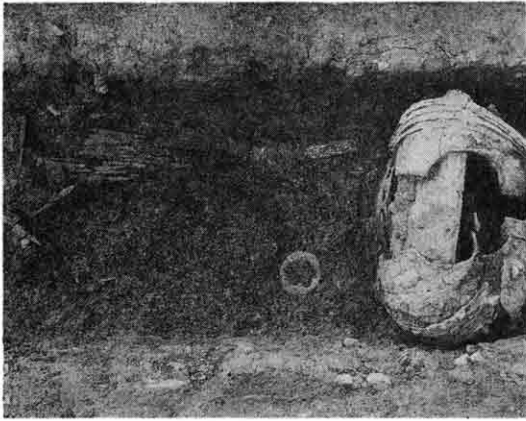


写真9 第1主体部遺物出土状況

第1主体部では、鉄剣を除くほとんどの遺物が、棺の西側で出土した。短甲・頸甲・肩甲・冑のセットが最も西に据えられ、その東からは、漆(草摺)・豎櫛・玉類が出土している。短甲東側の南よりには、鉄鎌が胡籙に収められた状態で置かれていた。北よりからは、径8.7cmの鏡が鏡面を上に向けた状態で出土したが、摩滅が著しく、形式は不明である。

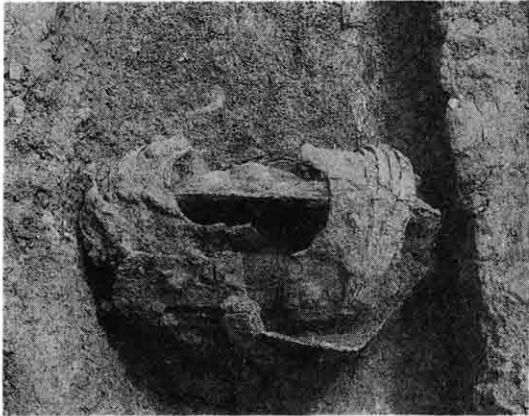


写真10 第1主体部短甲・冑・頸甲・肩甲

第1主体部の棺内西側から出土した短甲・冑・頸甲・肩甲である。短甲は三角板革綴短甲である。前胴部を西側木口に向け埋納されており、頸甲と肩甲が、付随されていた。また、短甲内部には、三角板革綴衝角付冑が収められていた。



写真11 第1主体部胡籙金具・帯金具

胡籙金具(吊り手金具の部分)は、鉄地金銅張り、帯金具(鉸具)は、金銅製である。吊り手金具の下に帯金具が重なった状態で検出された。金具の遺存状況は良好で、金具の表面は、波状列点文が施されている。また、金具の裏面には、布地の付着が全面で認められる。

第2主体部の西側木口付近である。第2主体部の棺の側面と木口付近の上部は、粘土で覆われていた。その西側の被覆粘土の下から短甲が後胴部を上にするように倒れ込んだ状態で検出された。短甲の遺存状況は、きわめて良好であった。

短甲内には、三角板革綴衝角付冑・板鍔が収められていたほか、勾玉・白玉等が確認された。



写真12 第2主体部短甲の検出状況（西から）

第2主体部出土の短甲は、第1主体部出土のものと同様、三角板革綴短甲である。短甲の東側からは、鉄鍔が、西側木口付近の被覆粘土の下からはミニチュア農工具類が、それぞれまとめて検出された。また、短甲の西側には、直立する粘土が付着していることから、仕切り板の存在が考えられる。



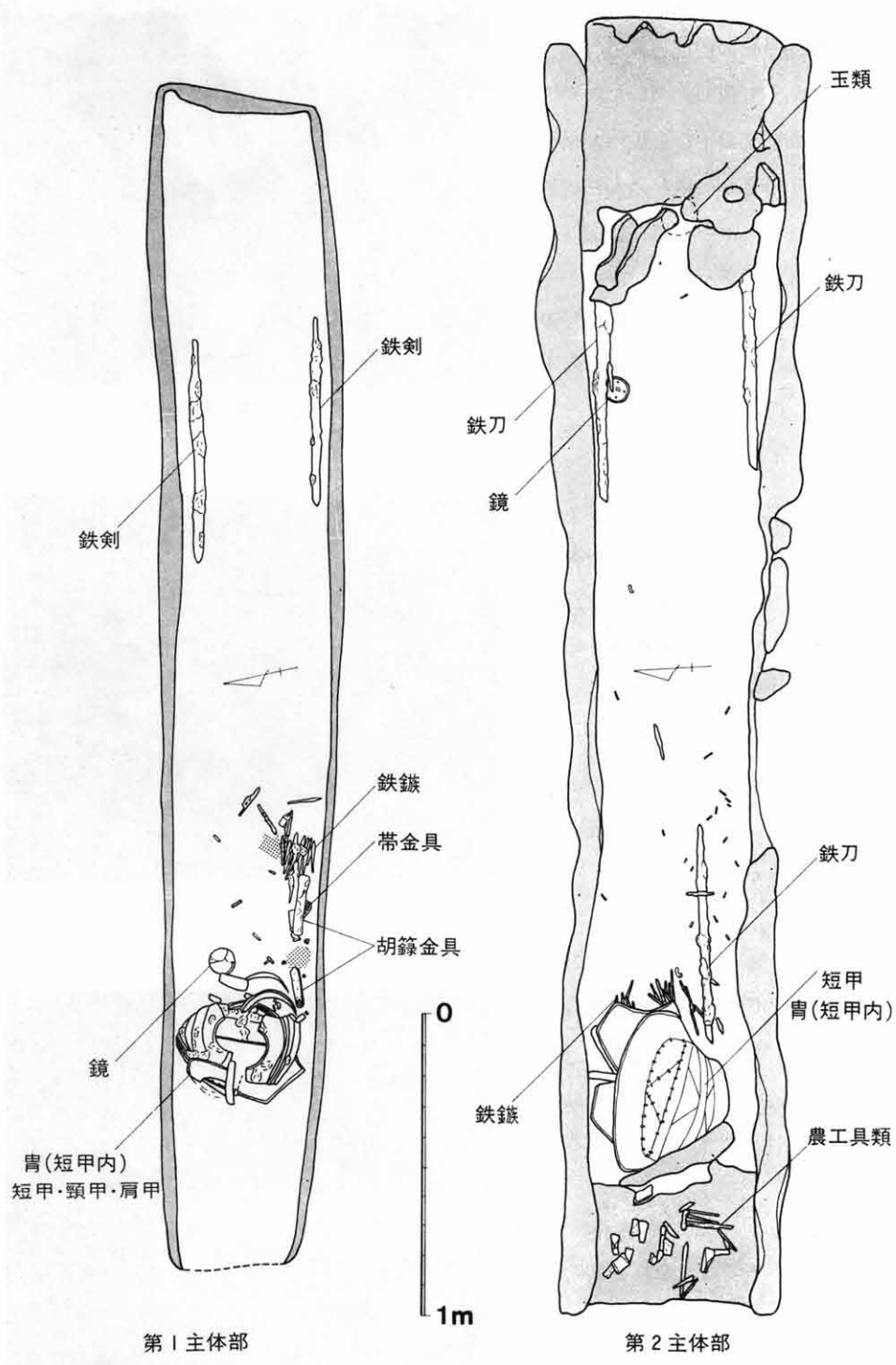
写真13 第2主体部短甲出土状況（南から）

棺の東側、北よりから鏡と鉄刀・刀子が出土した。鏡は、鏡背を上にしており、鏡の上には刀子が重なっていた。鏡は、直径9.1cmを測る捩文鏡である。

鏡周辺の棺底には、朱の痕跡が確認された。被葬者は、頭部を東側に向けていたと考えられるため、鏡は胸部右側の位置にあたる。



写真14 第2主体部鏡出土状況



第3図 第1・2主体部遺物出土状況図

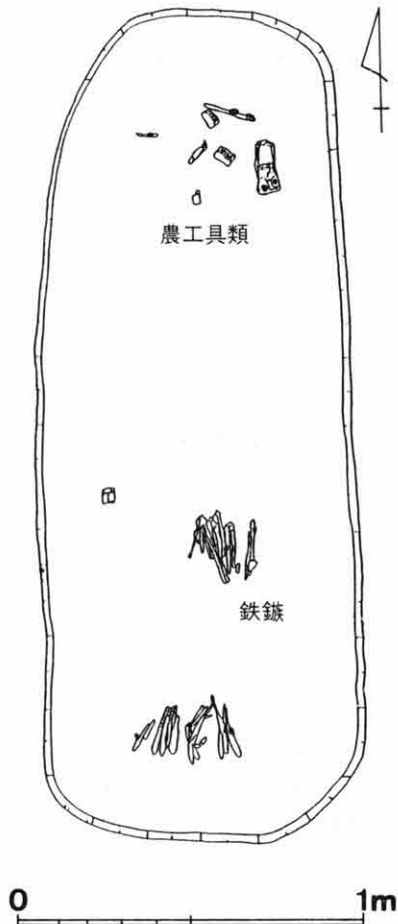


写真15 第3主体部遺物出土状況(南から)

第4図 第3主体部遺物出土状況図

第3主体部は、長軸を南北方向にとり、隅丸長方形の土壇である。土壇の深さは、検出面から約5cmであり、上部は削平されたと考えられる。また、棺の痕跡も確認できていないが、現段階では、木棺直葬の主体部と考えておきたい。遺物は、棺の北側に鉄製農工具類(斧・鍬先・鎌・鉈・刀子)、南側に鉄鍬等が出土した。鉄鍬は、2群にまとめられ、それぞれの切っ先が反対を向くように配置されている。

5. ま と め

(1) 墳丘 今回の調査で私市円山古墳は、円丘径71m・全長81mを測る、京都府下では最大規模の円墳であることが判明した。墳丘は、後世の削平もほとんど受けず、葺石・埴輪列とも遺存状況は比較的良好であり、築造当初の姿を窺うことが可能である。墳丘には主として由良川から運んだ河原石を葺石として用い、また、多量の埴輪を樹立するなど、

当地域にあっては最大の労働力を費やして築造された古墳であるといえよう。

(2) 出土遺物 第1・第2主体部から出土した、武具・武器・鏡・玉類などの豊富な副葬品は、政治的・軍事的に当地域を支配した被葬者の性格を如実に表わすものといえよう。

個々の遺物を見ると、第1主体部から出土した胡籙は、出土状況がきわめて良好であり、その全容をほぼ復原することができると思われる。全国的に見ても胡籙の出土数は少なく、その実態についてはまだ十分に解明されていない。今回出土した胡籙は、きわめて資料的価値の高いものである。

また、第1主体部出土の短甲は、冑・頸甲・肩甲・草摺を、第2主体部出土の短甲は、冑・鋌を併せ持つものであり、各形式のセット関係を知る上で良好な資料である。いずれも革綴短甲・革綴冑としては、出土状況及び遺存状況がきわめて良好であり、ほぼ埋納時の状態を保っていたことが特筆される。

(3) 築造年代 古墳の築造された時期は、出土遺物より、古墳時代中期中頃(5世紀中葉)前後と考えられる。各主体部については、第1主体部の埋土内に埴輪片が含まれていることなどから、第2主体部→第1主体部の築造順位が考えられる。しかし、出土遺物に型式差があまり認められないことから、比較的短期間のうちに続けて営まれたものと考えられる。

(4) 私市円山古墳の位置づけ 私市円山古墳は、全長81mの造り出しつきの円墳であり、埴輪・葺石・段築を有するなど、由良川流域にあって、きわめて卓越した様相を呈する。私市円山古墳の築造された古墳時代中期は、当地域では弥生墳墓的な古墳時代前期の方墳から定形化した方墳へ推移した時期であり、綾部市菖蒲塚古墳・同聖塚古墳・福知山市妙見1号墳などの方墳が当地域の首長墓として築造されている。私市円山古墳は、これらとは墳形・立地を異にし、規模においてこれらの古墳をはるかに凌駕している。また、先述の方墳群は、近隣にそれぞれの地域において古墳群を形成しているのに対し、当古墳の位置する場所は、由良川中流域にあたる福知山盆地のほぼ中央部であり、古墳時代を通じて、古墳があまり築造されておらず、私市円山古墳が単独で存在している。そのために、埴輪・葺石・段築などの畿内の要素を取り入れながら、墳形において在地的な様相を持つ先述の大型方墳群に対し、この古墳はきわめて畿内的で、当地域において全く異質な首長墓と言えよう。
(なべた・いさむ=当センター調査第2課調査第2係調査員)

付記 今回の概要作成にあたって、松田浩二・遠藤ひと美・大崎康文・池田純子・西世津子・中前幸子諸氏の協力を得た。記して感謝します。

昭和63年度発掘調査略報

4. ア サ バ ラ 遺 跡

所在地 熊野郡久美浜町大字新庄小字アサバラ

調査期間 昭和63年4月20日～7月20日

調査面積 約800m²

はじめに アサバラ遺跡の調査は、丹後国営農地開発事業「新庄1団地」の造成に伴う事前調査として行った。「新庄1団地」内の遺跡は、当初アバ田古墳群・崩谷古墳群が知られるのみであったが、周辺の分布調査を行ったところ、須恵器などの遺物の散布が認められたため、試掘調査を行った。その結果、竪穴式住居跡・土坑・溝・ピットを検出し、本調査を行うことになった。

調査概要 アサバラ遺跡は、山裾の緩斜面に位置する。調査は、まず試掘調査において竪穴式住居跡を検出したトレンチを中心に、600m²を重機によって掘削した。調査の結果、トレンチの西部で谷状地形(SD01)を検出し、そのほとりて竪穴式住居跡・ピットなどを検出した。

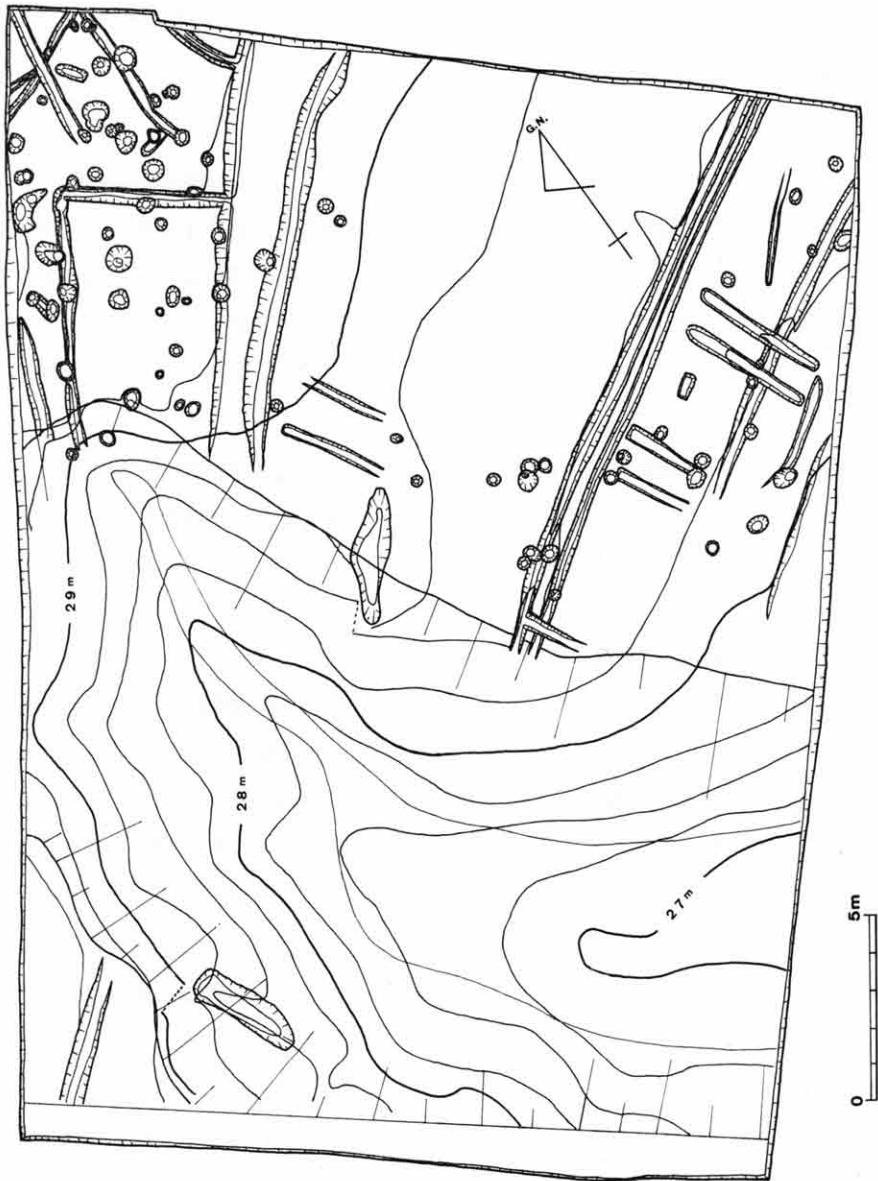
竪穴式住居跡SH02は、南東・南西の二辺が削平されているが、柱穴の位置などから一辺約6.6mの隅丸方形の住居跡と推測される。幅14～25cmの壁溝を持つ。壁の現存高は、最高で約23cmである。住居跡のほぼ中央に焼土があり、炉の痕跡と思われる。床面には直径約60cmの掘形を持ち、柱痕の残るピットが4基あり、4本柱の住居である。住居跡内からは須恵器・土師器が出土している。いずれも細片が多いが、TK23型式と考えられる蓋杯が床面から出土している。

SD01は、トレンチ西半部を北から南に流れる谷状の溝である。大きく2層に分かれ、遺物は上層からのみ出土している。須恵器・土師器・砥石などがある。出土遺物は、古墳時代後期から平安時代のものが混在しているが、6世紀代のものが主となる。

また、トレンチの西方約500mの地点では、工事中に遺構が発見され調査を行った。ここでは開墾などによって大きく削平されていたが、竪穴式住居跡が3基検出されている。これらの住居跡の時期は、遺物が細片のため不明であるが、周辺の出土遺物からSH02と同様の時期と推測される。

まとめ 今回の調査の結果、久美浜町内では初めて古墳時代後期の竪穴式住居跡を検出

できた。そして、同時期の住居跡が谷の中の緩斜面に散在することも推測し得る。遺跡周辺にある古墳は、権現山遺跡・アバ田古墳群など、住居跡と同時期のものは確認されていない。しかし、SD01の遺物には6世紀後半の遺物も含まれており、アバ田古墳群などの古墳と集落との関係を考えるうえで貴重な資料を提出したと言える。(荒川 史)



トレンチ実測図

5. 鳥 取 城 跡

所在地 熊野郡久美浜町浦明
 調査期間 昭和63年4月21日～8月6日
 調査面積 約730m²

はじめに 鳥取城跡の調査は、丹後国営農地「浦明団地」の造成に伴う事前調査である。昨年度の試掘調査の結果、丘陵先端部の平坦地に城に関係するとみられる遺構が検出されたため、今年度の本調査を実施した。

調査概要 調査は、北西にのびる丘陵の先端部の平坦地を第1調査区、丘陵の北側斜面に近い土塁状の高まりを第2調査区として行った。調査の結果、第1調査区では、溝・土坑・ピット等を検出した。土坑1・溝3・溝8は一連の遺構であり、溝3からは14世紀末～15世紀初頭の青磁碗が出土し、溝8からは茶臼が出土していることから城に関係する遺構であると考えられる。溝1・2・4・5・7は時期を特定することは難しいが、城の平坦地を区画する溝であった可能性が考えられる。第2調査区では、土塁状の高まりを断ち割った結果、西端部のみ約30cmの盛土がなされていることが判明し、城の北面に対する防御の施設であったと考えられる。この他、弥生時代の遺構として、ピット・中期後葉の溝(溝6)、後期初頭の土坑(土坑2)を検出した。土坑2からは、高杯・甕・短頸壺・水差・長頸壺各一個体が同じ方向に口縁部を向けて倒れた状態で出土している。遺構の性格は詳ら

かではないが、すべての土器に朱が塗られた痕跡の認められることから、何らかの祭祀に関わる土坑であろう。また、多数検出したピットの中に、弥生土器が出土するものがあり、丘陵上に弥生時代の集落が営まれていたものと思われるが、鳥取城などによって削平されたと考えられる。

出土遺物としては上記のほか、旧石器時代のもつと見られるスクレイパー等がある。

まとめ 今回の調査の結果、鳥取城は丘陵の最先端部まで広がっていたことが事実となったほか、築城時期についても、遅く

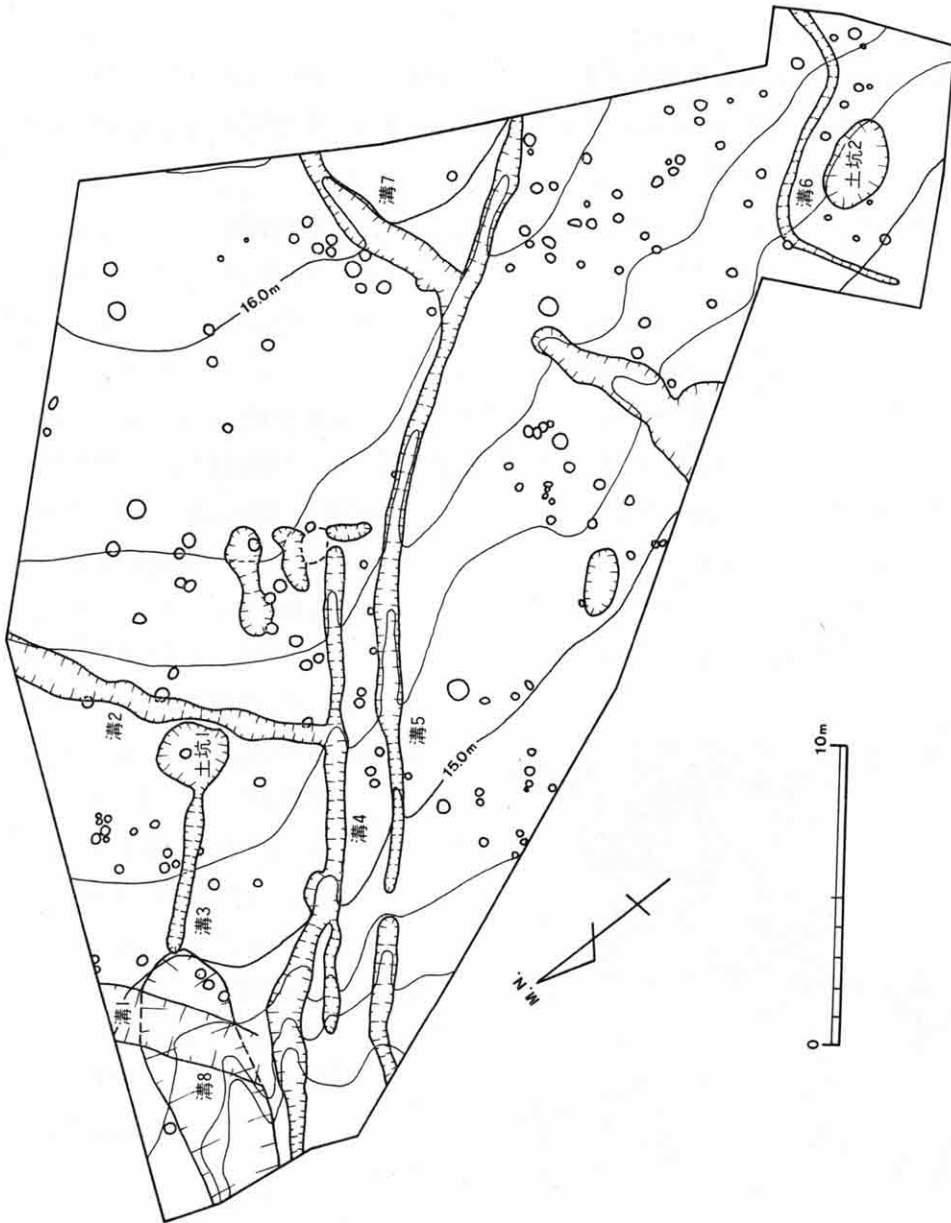


第1図 調査地位置図 (1/50,000)

とも15世紀初頭頃まで遡ることが判明した。

また、弥生時代には丘陵上に集落が広がっていたことが予想されたことは新たな知見であった。遺物の面では、土坑2出土の弥生土器が丹後地方の土器研究にとって貴重な資料となるほか、スクレイパーは丹後地方の歴史をさらに遡らせる最古の遺物として重要である。

(森島 康雄)



第2図 第1調査区平面図

6. 福垣北古墳群

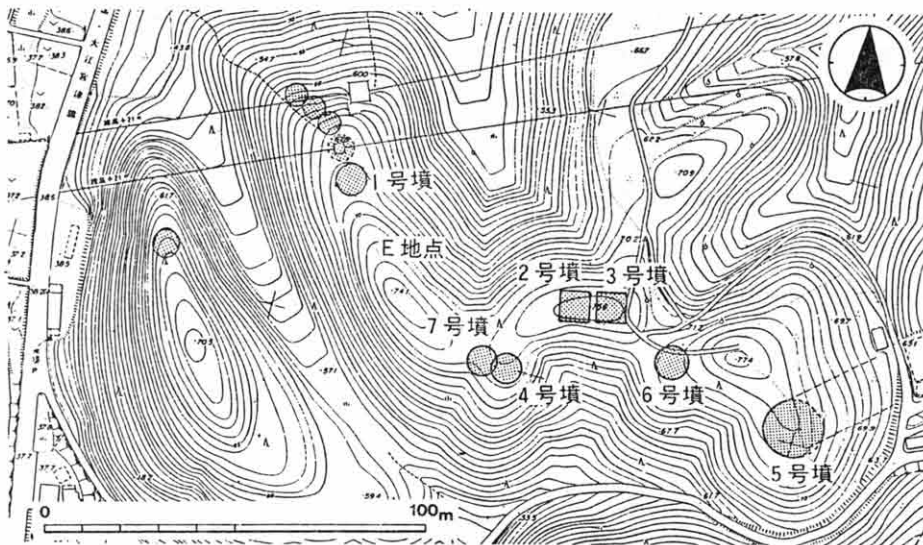
所在地 綾部市豊里町
 調査期間 昭和63年4月14日～8月31日
 調査面積 約2,500m²

はじめに 福垣北古墳群は、綾部市の西郊にある以久田野丘陵から派生する尾根上に築造された小古墳群で、11基で構成されている。当古墳群は、総数約120基ともいわれる中丹地域最大の以久田野古墳群の一角に位置し、以久田野古墳群の構造・性格を知る上でも重要な位置にある。

当調査研究センターでは、昨年度から、近畿自動車道舞鶴線敷設工事に伴い、福垣北古墳群の発掘調査を実施してきた。昨年度は、11基の古墳のうち2・3・4・5号墳の4基について、今年度は、1・6・7号墳の3基とE地点の試掘調査を行い、調査をほぼ終了した。調査成果は別表に示すとおりである。

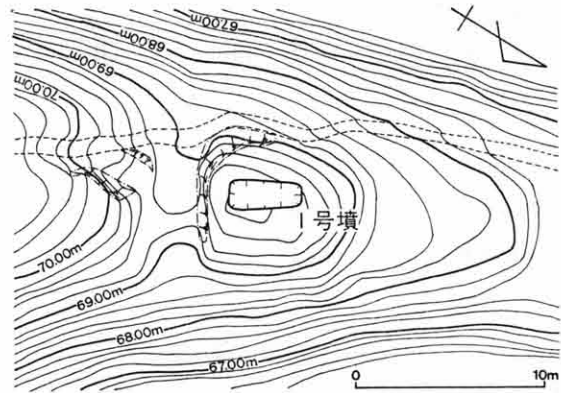
本稿では、今年度調査分についての概要を報告することにした。

調査概要 ①1号墳 1号墳は、今回の調査でE地点と呼んだ丘陵の中腹に位置する。この丘陵の尾根先端には5基の小円墳が裾を接して築造され、支群を形成している。この支群の最上部に位置するのが1号墳である。



第1図 福垣北古墳群地形図

墳丘は、丘陵の自然地形を最大限利用して築造されており、地山を削り出す手法がとられている。盛土は封土として墳丘頂部にわずかに盛られる程度であった。墳丘形態は、丘陵主軸に沿って長く、長楕円形を呈している。規模は、長径で約10m、短径で約8.5m、高さは約1mである。

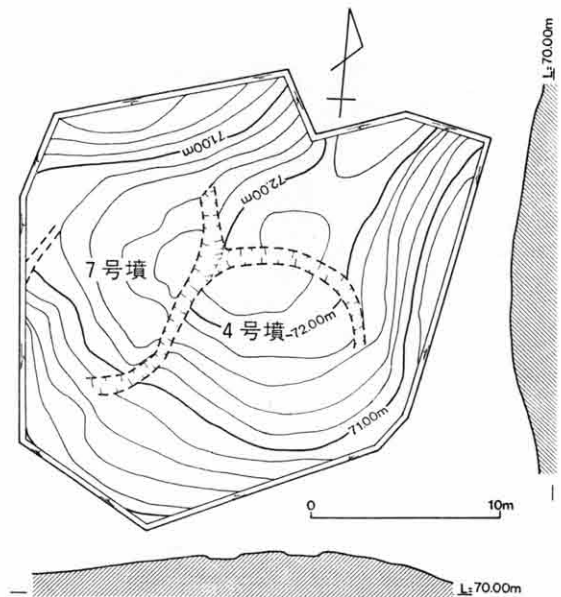


第2図 第1号墳墳丘測量図

表土直下において主体部を検出した。主体部は、墳丘が大きく削平されているため残りが悪く、墓壙の深さは約20cmばかりであった。平面形態は隅丸の長方形で、規模は長さ約3.7m・幅1.4mを測る。鉄鏃・鉄斧・鉄鎌などの鉄製品類が出土した。墳丘裾から須恵器甕体部破片が微量出土している。築造時期は明確でないが、鉄鏃の被棘が発達していることや須恵器の存在などから、6世紀代のものと考えておきたい。

②6号墳 6号墳は、2・3号墳と5号墳の間に位置する。開墾等により墳丘は全壊状況であり、墳丘規模・形状は不明である。主体部の一部のみを確認した。主体部は、長方形を呈する二段墓壙である。墓壙の長さは3.7m、幅は1.7mを測る。棺内から鉄刀・鉄鏃・刀子が、墓壙埋土上面より土師器壺破片が出土した。また、墳丘部の攪乱層において須恵器高杯蓋と鉄鎌を検出している。この遺物が6号墳に伴うものとするれば、6号墳の築造年代は5世紀中ごろ以前と考えることができる。2・3号墳と同時期かやや先行する時期の築造ということになる。

6号墳の位置する丘陵をやや下った地点で楕円形の小土坑を確認した。土坑内から土師器壺片が出土した。

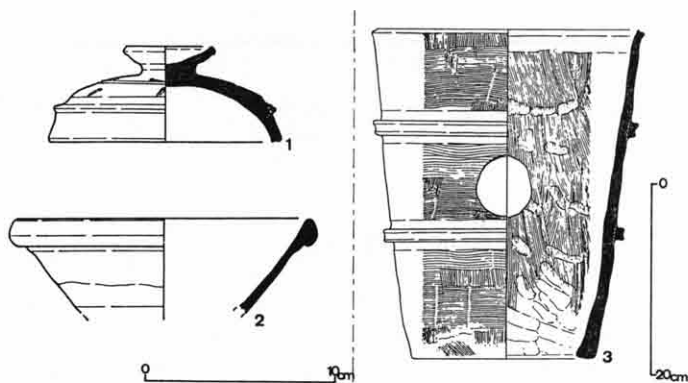


第3図 第4・7号墳墳丘測量図

③7号墳 2・3号墳のある丘陵

とE地点の丘陵鞍部に築造されている。

4号墳の周溝を一部壊して墳丘区画溝を作り出している。この古墳は、4号墳と同様、削平されて墳丘のほとんどが欠失し、墳丘を区画した溝だけが残っている。



第4図 出土遺物実測図
1:6号墳, 2:E地点, 4:7号墳

溝の形状から約9m×12m程度の楕円形の古墳であったと推定することができる。4号墳の築造後、尾根上の限られた場所を用いたため尾根主軸に直交して溝を切り、台状墓的な墳丘築造を行ったものらしい。南側の溝から円筒埴輪数個体分の破片を検出した。埴輪は、川西編年のⅣ期に該当し、4号墳出土のものと同様の特徴を持つ。

④E地点 この地点は、2から7号墳の所在する丘陵の端部側にあたる丘陵である。独立丘陵状を呈し、頂部が平坦である。隣接地点に同様の形状の丘陵があり、そこで城館跡がみつまっていることなどから、関連施設の存在を推定して、頂部および斜面部分を調査した。しかし、遺構の存在を確認することはできなかった。わずかに、白磁碗と燈明皿の破片を確認したにとどまる。

おわりに 今年度の調査成果は以上のとおりである。昨年度からの成果を簡単にまとめると次のようになる。

① 当古墳群は、当初、1基の古墳が確認されたにすぎなかったが、発掘調査によって11基あることが分かった。この発見で、この古墳群が以久田野古墳群の一支群と考えることができるようになり、以久田野古墳群の範囲を若干西へ拡げて考える必要が生じた。

② 当古墳群は、5号墳を築造契機として、尾根の基部側から端部に向かって順次築造されていることが確認された。従来、以久田野古墳群は、5世紀後半から築造が始まると考えられてきたが、今回の調査で5世紀前～中頃まで遡ることが明らかとなった。

③ 各古墳は、区画溝を設けたり削り出すなど、丘陵の自然地形を最大限に利用して墳丘を形成しており、あまり盛り土を持たない点で共通している。いずれも木棺直葬墳で、あまり副葬品を持たない。

④ 出土した須恵器は古式のものである。当該地域の初期須恵器のありかたを考える上で重要な資料となった。

(田代 弘)

福垣北古墳群検出遺構一覧表

名 称	外形・規模	埋葬施設	出土遺物	備 考
福垣北第1号墳	楕円形 長径約10m×短径8.5m	木棺直葬 墓壙；長軸3.7m×短径1.4m 棺形態不明	墓壙内；鉄鏃・鉄斧， 鉄鎌 墳丘より須恵器破片 少量出土	墳丘は自然地形利用 削平大きい
福垣北第2号墳	方墳 東西15m?×南北17m?	組合せ木棺 墓壙；長軸3.9m×短軸1.6m 棺；長さ2.6m×幅4.5m	棺内；鉄鏃13本・鉄剣1刀 墓壙内；鉄斧 棺上；土師器 墳丘斜面；須恵器樽形甕	地形は自然地形を利用しており，墳丘基底は不明瞭
福垣北第3号墳	方墳 東西18m×南北16m?	組合せ木棺 墓壙；長軸4.0m×短軸1.45m 棺；長さ2.3m×幅70~80cm	棺内；鉄器片 棺上；須恵器壺(あるいは甕)・壺(須恵器は棺上に壊した状態で出土)	第2号墳と同様，自然地形を利用しており，南北の墳丘基底部は不明瞭，東西は丘陵に直交する溝により区画
福垣北第2号墳 周辺第1埋葬施設	第2号墳の北斜面に平坦部を造り，墓壙を掘る	組合せ木棺 墓壙；長軸3.8m×短軸1.15m 棺の規模は不明	棺内；勾玉1・小玉300以上 棺上；須恵器甕	
福垣北第2号墳 周辺第2埋葬施設	第2号墳の北西斜面にある	不明	なし	主体部かどうか不明
福垣北第2号墳 周辺第3埋葬施設	第2号墳の西側斜面にある	不明	なし	主体部かどうか不明
福垣北第2号墳 周辺第4埋葬施設	第2号墳の南側斜面に平坦面を造り，墓壙を掘る	組合せ木棺 墓壙；長軸3.65m×短軸1.2m 棺；長さ2.3m×幅0.5m	棺内；小型仿製鏡・ 瑪瑙製勾玉3・碧玉製管玉・ガラス小玉 棺上；須恵器甕・土師器	
福垣北第4号墳	円墳 推定11m 周溝がめぐる	不明	周溝内より円筒埴輪 出土 川西編年のⅣ期	第4号墳は削平を受け主体部および墳丘は残っていない。一部周溝がめぐるのみである。
福垣北第5号墳	円墳 径20m 周溝がめぐる	割竹形木棺 墓壙；長軸6.2m×短軸2.15m 棺；長さ4.5m×幅0.5m	なし	
福垣北第6号墳	不明	木棺直葬 墓壙；長軸3.7m×短軸1.7m 木棺；長軸2.95m×短軸0.75m	墓壙内；鉄刀・鉄鏃 墓壙上面；土師器破片 墳丘；鉄鎌・須恵器高杯蓋	主体部のみ残存
福垣北第6号墳 周辺土壙	楕円形 長軸約70.6m×短軸約0.5m		土師器壺破片	土器棺か
福垣北第7号墳	楕円形 長径約12m×短径約10m	不明	溝内；埴輪	墳丘区画溝のみ残存

7. 長岡京跡左京第202次 (7ANFNF5)

所在地 向日市上植野町西大田
調査期間 昭和63年8月8日～昭和63年10月4日
調査面積 約260m²

はじめに 今回の調査は、京都府立向陽高等学校の体育振興施設の建設に先立ち実施したものである。調査対象地は、長岡京跡左京四条二坊八町にあたり、町割りを示す三条大路の側溝の検出が予想されるので、ここを中心に遺構・遺物等を得ることを目的に調査を行った。

調査概要 調査は、グラウンド東端にあるトレーニング棟の南側にトレンチを2か所設定した。北側のトレンチの規模は、18m×12mで、三条大路の南側溝を確認するため、4mほど北に拡張した。一方、南側のトレンチは、7m×7mの大きさで、北側との間に排水溝が埋設しているため、そこから約5m離れた。トレンチの基本的な層序は、盛土(グラウンド)、旧耕作土、床土、黄灰色粘質土、青灰色粘質土、暗灰色粘質土、砂層である。遺構の検出面(長岡京期)は、地表下2.0mで、標高18.0mを測る。

調査の結果、三条大路南側溝、掘立柱建物跡、溝状遺構、土坑、流路(河川)等の遺構を確認した。遺物では長岡京期のものがほとんどで、その中で、漆が付着した土器、漆塗り土器、木製品の出土したことが特徴的である。以下、略述する。

三条大路南側溝 トレンチ北側拡張区で、幅1.4m・深さ0.4mを測り、断面皿状を呈する東西の素掘り溝である。これは長岡京跡左京第119次で確認されている北側溝から南へ9mの位置に当たる。溝中には、長さ1m・幅0.2m・厚さ2cmの板が杭一本で設置されており、溝幅を狭くしている。溝の埋没状況は、部分的に流れは認められるものの、暗灰褐色粘質土が堆積していることから、人為的な廃棄であると思われる。溝中の遺物は、漆の付着した土器、斎串等である。

掘立柱建物跡 1 溝状遺構の西側で検出した2間×2間以上の東西棟である。柱間寸法



第1図 調査地位位置図 (1/50,000)

は、梁行2.85m(9.5尺)・桁行2.55m(8.5尺)を測る。柱の掘形は、隅丸方形(一辺0.4~0.5m)を呈し、4か所で柱(直径0.15m)が残存していた。

掘立柱建物跡2 溝状遺構の東側で確認した2間×2間以上の総柱の建物跡である。柱間寸法は東西1.8m(6尺)・南北2.1m(7尺)を測る。柱の掘形は、隅丸方形を呈し、一辺0.3mとやや小ぶりである。

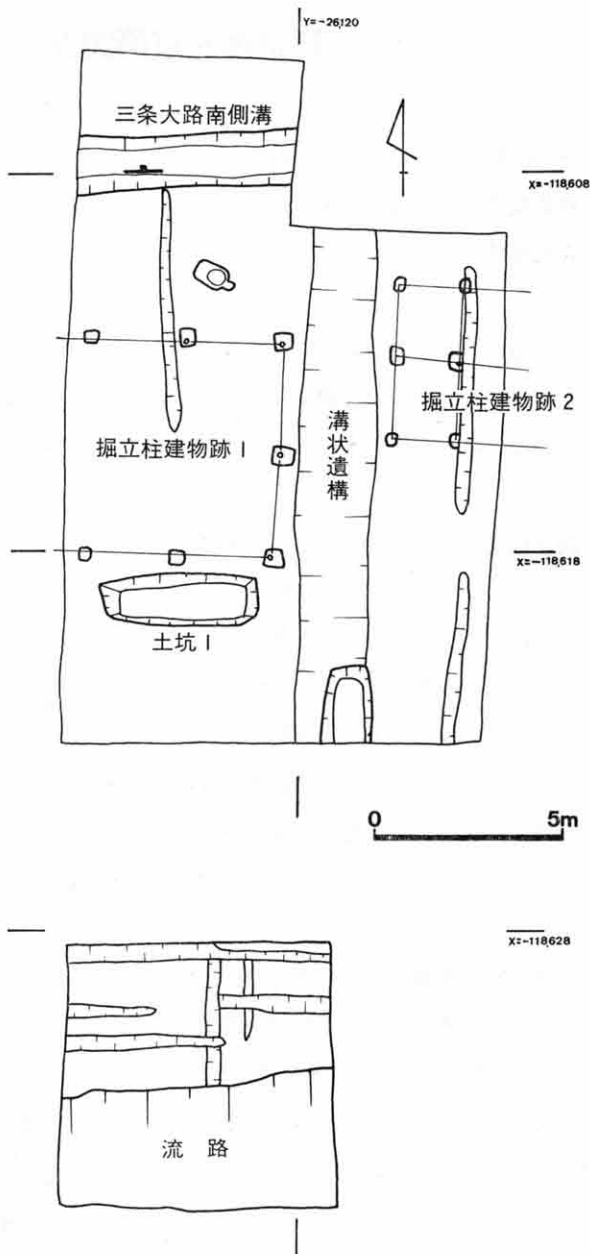
溝状遺構 上述の両建物跡を区切る南北方向の落ち込み状の遺構である。幅1.5~2.0m・深さ0.1mを測り、炭化物、焼土、土器類等が多く堆積していた。

土坑1 長軸4.0m・短軸1.4m・深さ0.2~0.3mを測る。堆積土は、暗褐色粘質土の単一層で、漆の付着した土器が出土した。

流路 南側トレンチの南半で、深さ0.7m以上の褐色砂礫の堆積層を確認した。流路は、東西方向に走り、急激な氾濫、浸食が見られた。

まとめ ①三条大路南側溝の検出により大路幅が3丈であることが確認できた。②掘立柱建物跡2棟、土坑や数多くの漆の付着した土器等から、漆職人の工房跡が想定できよう。

(竹井 治雄)



第2図 遺構実測図

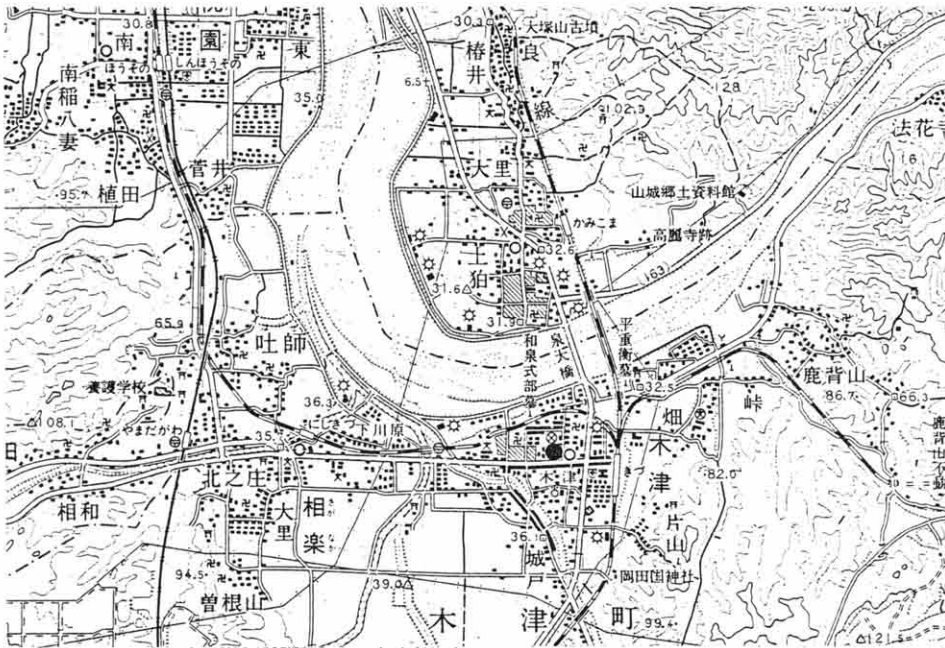
8. 木津遺跡第6次

所在地 相楽郡木津町大字木津小字南垣外
 調査期間 昭和63年8月10日～10月4日
 調査面積 約420m²

はじめに 木津遺跡は、木津川左岸に位置し、木津町市街地の大部分を占める遺跡である。木津町は、奈良と京都を結ぶ交通の要衝として発展してきたが、奈良時代には平城京の外港として特に栄えた。木津には平城京の官衙や諸大寺の木屋所が設けられ、木材をはじめとして多くの物資が集積した。当町はまた、推定恭仁京右京域内にあたるところでもある。木津遺跡には、これらの関連遺構が包蔵されていると推定されているが、その実態についてはよくわかっていない。今回の木津遺跡の発掘調査は第7回目にあたり、今までの調査では奈良時代～近世にわたる遺構・遺物が確認されている。

今回の発掘調査は、建設省近畿地方建設局京都管轄所の依頼を受け、木津簡易裁判所の改築工事に伴い実施した。

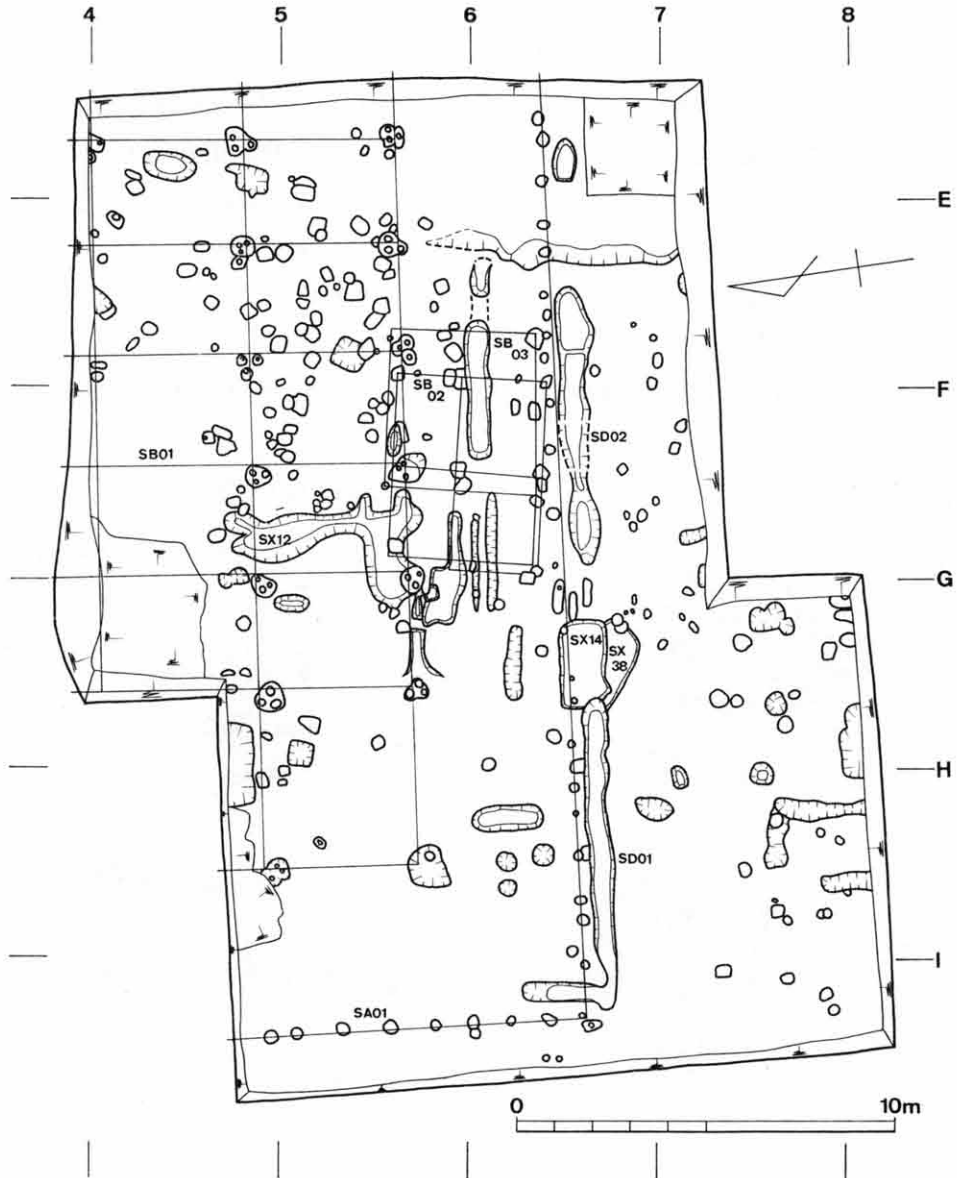
調査の概要 調査地の全域にわたって柱穴・土坑と奈良時代・中世を中心とする土器片



第1図 調査地位置図 (1/50,000)

を検出した。しかし、この地が木津川の氾濫原にあたるため、遺構の残り具合は悪く、建物に復原できるものは少ない。ここでは、主要な遺構について略述する。

SA01・SB01 これらの遺構には木杭が残存しており、それらより柵列・建物に復原できる。木杭は穴を掘って据えたものではなく、打ち込んだために直接的に遺構の年代を示す遺物の出土はなかった。壁面での土層観察による年代と建物配置から、大正から昭和に



第2図 検出遺構平面図

かけて、この地にあった綾部製糸工場または新綾部製糸工場の建物と考えられる。

SX14 6G地区で検出した土坑で、SX38と切り合って検出した。ともに奈良時代の土器片のみが出土した。その性格についてはよくわからないが、土坑の規模や土器の出土状態から、土坑墓と考えられる。

SB02・SB03 検出した多くの柱穴跡のうち、建物跡に復原できるものがある。SB02は2間×2間で、SB03は2間×3間で、重複している。出土遺物から奈良時代の遺構と考えられる。

噴砂 人為的な遺構とは別に、地震跡が2か所で検出できた。大きな地震動に伴い、地中の砂が水とともに吹き上がったもので、平面的には「地割れ」に砂が満ちたものである。今回検出したものは、直接その時期を示す資料は確認できなかったが、遺構面との関連から中・近世のものとする。

まとめ 今回の調査の成果を列举しておきたい。

- ① 隣接した調査地では遺構面を確認できなかったが、今回遺構を確認した。
- ② 奈良時代の土坑・掘立柱建物跡を確認し、実態のよくわからなかった木津遺跡の一端を窺える資料を得た。
- ③ 弥生土器が数点出土し、周辺に弥生の集落が包蔵されている可能性が指摘できる。
- ④ 木津遺跡では2例目の地震跡を検出し、広範囲に地震跡のあることがわかった。残念ながら、その時期については特定できなかった。
- ⑤ 中・近世の出土土器は角の摩滅した細片ばかりである。これは、その時期に田畑として利用されていたためと考えられ、特に江戸時代の絵図面と一致する。

(岩松 保)

資料紹介

高山古墳群(12号墳)出土の象嵌をもつ刀装具

増 田 孝 彦

1. はじめに

高山古墳群は、京都府の最北端、竹野郡丹後町徳光小字高山ほかに所在する。農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の高山団地造成工事に伴い調査を行ったものである。古墳群は、丹後半島中央部を北流する竹野川の一支流である徳良川左岸の丘陵上に立地しており、造成地内には9基の古墳が存在している。

調査は、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて、昭和61・62年度の2年度にわたり、京都府教育委員会と当調査研究センターが分担して行った。その結果、高山古墳群は横穴式石室を内部主体とする9基の古墳からなり、このうち8基を調査することになった。^(注1) 調査の結果、いずれも6世紀後半～7世紀初頭にかけて築造されたことが明らかとなった。これらの古墳からは、鉄製品・装身具・土器類等多くの副葬品が出土したが、このうち、1号墳からは鉄地金銅張雲珠^(注2)、3号墳からは銀製の喰出鐔と鉏が一体になった大刀が出土している。刀装具に銀装を施したものは、丹後地方では久美浜町湯舟坂2号墳、^(注3) 峰山町桃谷古墳^(注4)に次ぎ3例目である。

2. 高山12号墳の概要

古墳群中最北端に位置し、北西側には隣接して13号墳が築かれている。下方には、日本海(丹後町砂方)と最短距離で結ぶ旧街道が通じている。墳丘は、開墾により大きく削られほとんど平坦化しており、調査結果にみるような巨大古墳のイメージはなかった。

墳丘は、直径18mの円墳で、墳丘東側には尾根と区画する溝(幅6m・深さ1.6m)が設けられている。

石室は、西側に袖をもつ片袖式横穴式石室で、ほぼ南に開口する。石室全長12.15m・玄室長5.7m・玄室幅2.1～2.25m・同高2.9mを測る。羨道長6.45m、羨道幅は玄門部で1.7m、最前端で2.22m、高さ1.7mを測る。高山古墳群中最大規模を誇り、丹後半島でも最大級クラスの石室である。

石室内から出土した遺物は、武器・馬具・金具・装身具に大別され、その総数は480点を

越える。とりわけなかでも、金銅装双龍環頭大刀柄頭2口、金銅装喰出鐔、鉄地金銅張辻金具・鞍金具・革金具等の装飾性の高い刀装具・馬具類は特筆される。また、全国で7例目の出土となった特殊扁壺は、その分布という点からも注目される。

高山12号墳は、調査後、石室の一部を霧出させ、その大半を埋め戻し、隣接する13号墳(未調査)ともども現地で保存されている。

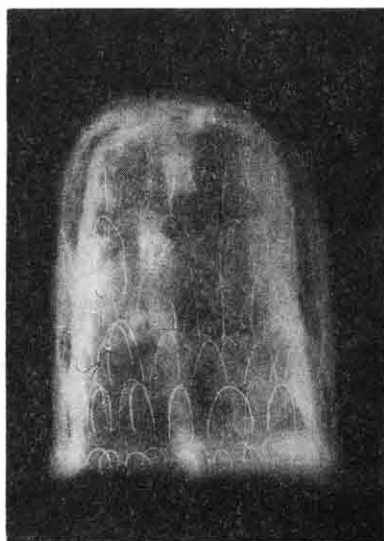
3. 象嵌の刀装具

出土した環頭大刀柄頭および鉄製品は、錆化が著しく、現状維持のため、京都府立山城郷土資料館に依頼し、保存処理を実施することになった。

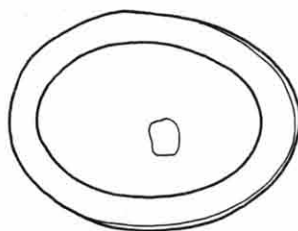
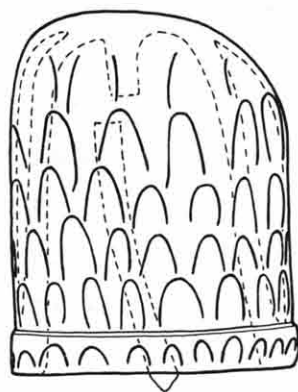
7年前に金銅装双龍(4龍)環頭大刀が出土した湯舟坂2号墳では、象嵌を施した円頭大刀柄頭が出土していることから、環頭大刀が出土した古墳という共通があるため、象嵌が認められる可能性があることから、大刀、刀装具類はすべてX線撮影が行われた。その結果、以下に報告する2点に象嵌が認められた。いずれも、出土した状態では完全に錆に被われており、X線撮影により初めて明らかになったものである。象嵌の表出が終了していないため、図示したものはX線写真を参考に図化したものである。

円頭大刀柄頭

小型の柄頭で長さ4.8cm、断面が楕円形を呈する。柄木を差し込んだ部分で長径3.8cm・短径2.8cmを測る。厚さは0.5cm程度である。中に円形の棒状突起があり柄木に差し込み固定しており、目釘等はない。X線写真で見ると限りでは、円形の棒状突起は途中で折れたような状況を示している。柄頭は、魚鱗状の象嵌を施した覆輪状の金具をか



円頭大刀柄頭 X線写真



円頭大刀柄頭略測図

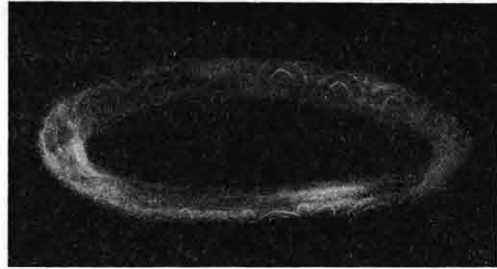
ぶせ、元の部分で締めて固定する。この元の部分にも小さな渦文の象嵌が施されている。象嵌の状況は良好なものと思われる。

湯舟坂2号墳出土の円頭大刀柄頭は、本古墳出土のものよりやや小ぶりであるが、象嵌が施された部分が少なく、精巧さでは本古墳出土のものの方が優品である。

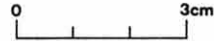
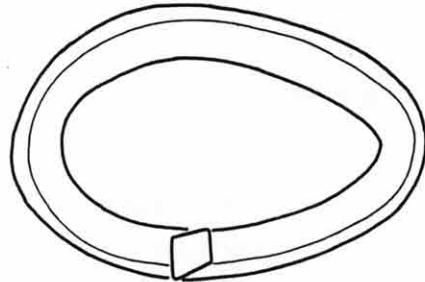
刀装具

柄縁金具と考えられるもので、倒卵形のリング状をなす。断面が台形状をなし、長径7.3cm・短径4.9cm・厚さ0.8cm・上辺側の長径6.9cmを測る。上辺側はややふくらむが、底辺側はほぼ水平である。

柄縁金具の側面に、底辺側から上辺側に連続した二重の渦状の象嵌を施し、さらに、谷にあたる部分には、二重の渦状の象嵌の頂点よりもやや上方に頂点がくるように、小さな渦状の象嵌が施されている。



刀装具 X 線写真



刀装具略測図

4. ま と め

12号墳から出土した豊富な遺物は、首長墓古墳の副葬品の全容をうかがう貴重な資料であるとともに、被葬者の政治勢力についても大和政権との関係だけでなく、特殊扁壺にみられるように、その分布範囲が広がると思われることから、広く周辺地域との関係も今後の課題となる。 (ますだ・たかひこ=当センター調査第2課調査第1係調査員)

注1 増田孝彦「丹後国営農地開発事業(丹後東部・西部地区)関係遺跡 (1)高山古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第29冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987

注2 岡田晃治「国営農地関係遺跡昭和62年度発掘調査概要[1] 高山古墳群」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1988)』 京都府教育委員会) 1988

注3 奥村清一郎他『湯舟坂2号墳』 久美浜町教育委員会 1983

注4 樋口隆康「峰山桃谷古墳」(『京都府文化財報告』第22冊 京都府教育委員会) 1961

府下遺跡紹介

42. 観音芝廃寺

観音芝廃寺は、亀岡市篠町篠観音芝に所在する寺跡である。かつては、寺名もわかっていたのであろうが、現在はすでに忘れ去られ、まったくわからなくなっている。寺の所在地についてもほとんどわからなかった。ただ、古瓦が表面採集できることから、かつて、寺院が存在したであろうことは、『篠村史』でも注目されていた。しかし、どのような規模の寺院がいつ頃から存在し、この地域でどのような役割をはたしたかについては、全くわかっていないという状況であった。

その後、昭和61年度から亀岡市教育委員会が主体となって、発掘調査が実施され、重要な事実が明らかになってきた。

元来、観音芝廃寺の所在するところは、亀岡盆地の東南部にあたり、いわゆる大堰川の河岸段丘の突端部になる。この地域は、古くから山城国から丹波国への交通の要衝上にあたり、丹波国の入口のところになる。そのため、都が平城京から長岡京、そして平安京へと遷るたびにその重要性がましていった地域でもある。そのため、仏教が比較的早くこの地域に入って寺院が建立されたと見られる。

発掘調査の結果、畑地の中にあつた一辺20mの土壇は、金堂跡と確認されるに至つた。この堂跡の基壇は、側面を瓦積みで化粧する、いわゆる瓦積基壇で、もっとも残りがよく、東西18.2m・南北15.4m・高さ1~0.4mの規模で検出されている。この基壇の上に建つ建

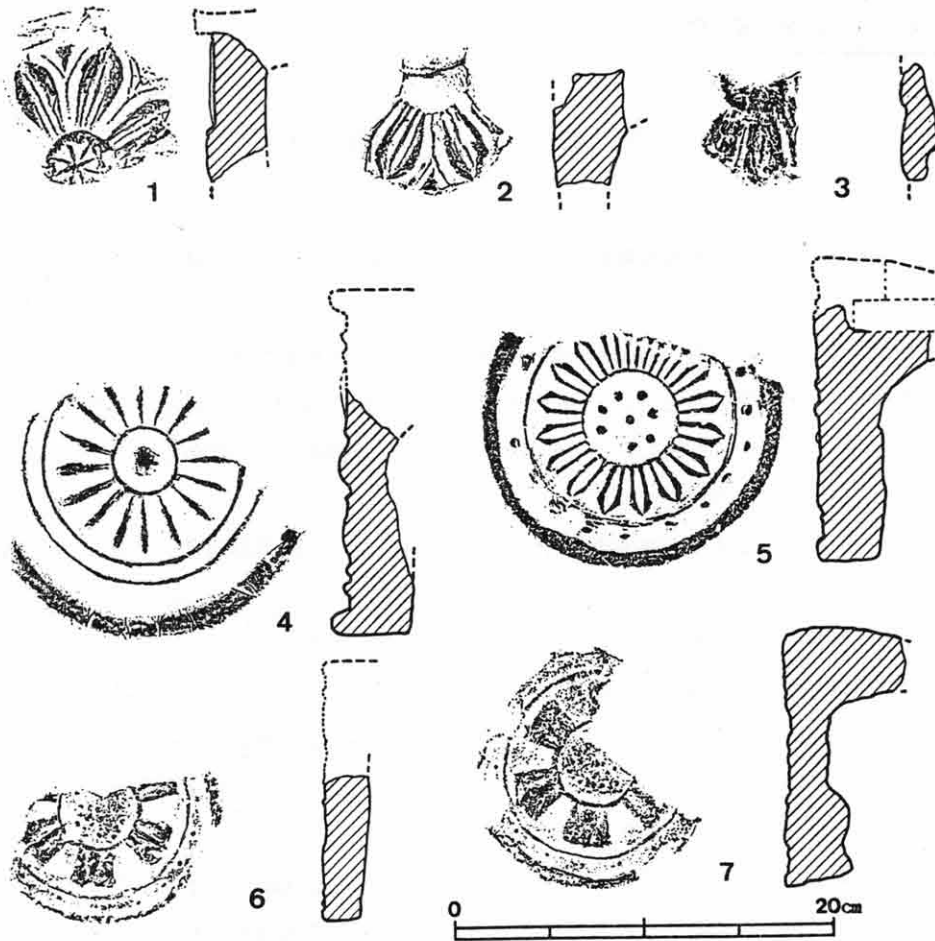
物は、残っていた根石などの柱痕跡から、東西桁行12.4m×南北梁間9.5mの5間・4間の規模と推定された。

また、金堂跡の北側約38mのところ、東西桁行7間×南北梁間4間の掘立柱建物跡が見つかっている。いずれも一辺約1mというほぼ同規模の柱掘形をもち、それが等間隔に並んでいるだけでなく、位置関係からも講堂跡と推定された。

その他、講堂跡の北側で掘立柱建物跡が確認され、また金堂跡の南側と東側で、寺



第1図 遺跡所在地 (1/50,000)



第2図 出土軒丸瓦拓影（『観音芝廃寺発掘調査報告』より）

1・2・3：創建時，4：第1次修理時，5：第2次修理時，6・7：第3次修理時

域を画すると思われる築地に伴う溝跡も見つかっている。それだけでなく、寺域東限の築地の近辺で、この寺で用いられたと考えられる梵鐘の鋳造跡が見つかり、当時のこの寺の工事のようすがうかがえた。

このように、発掘調査では多くの遺構が見つかり、大きな成果を収めた。出土遺物としては、瓦類だけでなく、土師器や須恵器なども見つかり、これらの遺物から、この寺の建設に関して、次のような画期が想定されるようになった。

早創期 いわゆる白鳳時代の瓦の出土する時期で、観音芝廃寺が建立されたときにあたる。この時代には、全国的にもかなりの寺院が建立されており、この寺も当時の時流に合わせたように創建されている点がおもしろい。なお、この時期の瓦は、同じ亀岡市の千代川桑寺廃寺でも出土しており、亀岡盆地でも寺院の本格的な建立が始まった時期と捉える

ことができよう。

第1次修理時 8世紀中葉の大修理の時期で、主に金堂の瓦積基壇が改修されている。このことは、瓦積基壇に用いられた瓦からうかがうことができる。

第2次修理時 8世紀後半の修理の時期で、この時期の瓦は、丹波国分僧寺からも出土している。軒丸瓦の大きさが比較的小さく、範も小さくなっていることが指摘されている。

第3次修理時 11世紀の修理で、観音芝廃寺では最後の修理にあたる。この時期の瓦は、この寺から近くの亀岡市王寺三軒屋付近の瓦窯で焼かれ、平安京内からも出土している。

以上の4時期に分かれるが、平安時代も後期になると、寺の修理も行われなくなったようで、それからほどなく廃絶したらしい。このような観音芝廃寺の経過は、篠窯跡群の消長と軌を一にしていることから、窯業生産集団を統括した氏族の氏寺として考える意見がある。しかし、篠古窯跡群は、8世紀の中葉以降に全盛期を迎えるのであり、観音芝廃寺の創設とは約半世紀のズレがある。また、篠窯跡群の消長が官営工房の様相を示すだけでなく、観音芝廃寺と篠窯跡群とは直接関係するものではないので、安易に一氏族の氏寺に結びつけることは慎むべきであろう。

なお、化粧基壇を持たない講堂と、化粧基壇を持った金堂という珍しい形態を持つ点についてであるが、宇治市の岡本廃寺でも同じような形態を示すことが言われている。今後、地方寺院のあり方として、本尊を安置する金堂のみに化粧基壇を用い、それ以外の堂宇については、掘立柱建物ですませたような検出例が増加するものと思われる。

(土橋 誠)

<参考文献>

『篠村史』 1961

『観音芝廃寺発掘調査報告』(亀岡市文化財調査報告書 第20集 亀岡市教育委員会) 1988

長岡京跡調査だより

昭和63年8月24日と9月28日、10月26日に開催された長岡京連絡協議会で報告のあった発掘調査は、下表に示すとおり、宮域6件、左京域4件、右京域7件の計17件を数える。このうち、主なものいくつかをとりあげ、それらの調査成果について、以下簡単に紹介する。

宮内第217次 (3)

(財)向日市埋蔵文化財センター

調査地は、長岡宮北辺域、推定北京極大路の北接地にあたるとともに渋川遺跡の範囲内にも該当している。長岡京関係の遺構としては、3間×3間の総柱の掘立柱建物跡1棟のほか、土坑・井戸各1基が検出されている。図にしめしたように、平城京型復原案によると京域外に相当しており、長岡京の北方への展開をさぐ

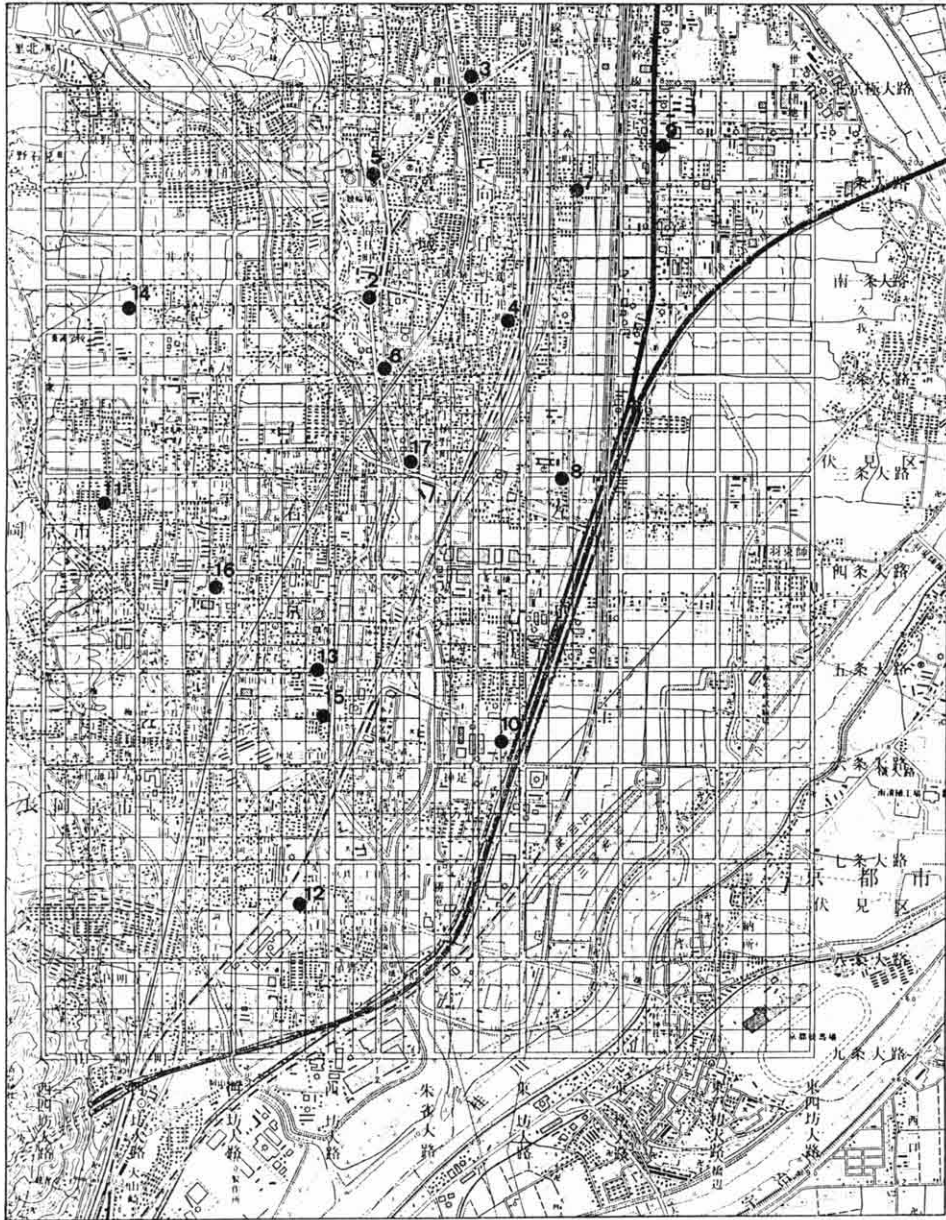
調査地一覧表

(昭和63年10月末現在)

番号	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第215次	7AN6K	向日市寺戸町渋川3-23	(財)向日市埋文	8/18~
2	宮内第216次	7AN19G	向日市向日町南山39	(財)向日市埋文	8/29~9/16
3	宮内第217次	7AN6L	向日市寺戸町西田中瀬3-1他	(財)向日市埋文	8/30~10/18
4	宮内第218次	7AN5D-2	向日市鶏冠井町堀ノ内	(財)向日市埋文	9/16~9/20
5	宮内第219次	7AN17B	向日市寺戸町西野辺1-3	(財)向日市埋文	9/29~10/15
6	宮内第220次	7AN15R	向日市上植野町山ノ下2-52	(財)向日市埋文	9/30~10/12
7	左京第201次	7ANDHC-2	向日市森本町東ノ口2-4	(財)向日市埋文	8/3~8/31
8	左京第202次	7ANFNT-5	向日市上植野町西太田	(財)京都府埋文	8/1~10/4
9	左京第203次	7ANVMK	京都市伏見区東土川町	(財)京都市埋文	9/1~
10	左京第204次	7ANMYD	長岡京市神足焼町1	(財)長岡京市埋文	9/26~
11	右京第312次	7ANJNM-2	長岡京市今里新池5-1	(財)長岡京市埋文	8/4~9/14
12	右京第313次	7ANRHM-2	長岡京市久貝二丁目401-2	(財)長岡京市埋文	8/25~8/29
13	右京第314次	7ANKST-2	長岡京市開田二丁目207-5他	(財)長岡京市埋文	8/31~
14	右京第315次	7ANGHD-4	長岡京市井ノ内広海道37-1	(財)長岡京市埋文	9/12~
15	右京第316次	7ANMHK	長岡京市神足三丁目521他	(財)長岡京市埋文	9/13~9/16
16	右京第317次	7ANKKS-3	長岡京市長岡二丁目127-1	(財)長岡京市埋文	10/4~10/22
17	右京第319次	7ANFZG-5	向日市上植野町地後13	(財)向日市埋文	10/24~

長岡京条坊復原図

平城京型復原による



数字は本文（ ）内と対応

る上での好資料が得られた。このほか、古墳時代前期の土坑・旧河道や中世の素掘り溝など、渋川遺跡に関係する遺構・遺物も検出されている。

左京第202次 (8)

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

府立向陽高校のグラウンド内で実施された、小規模な発掘調査である。三条大路の南に接する、左京四条二坊八町推定地にあたる。長岡京関係の遺構としては、三条大路南側溝、溝状遺構1、掘立柱建物跡2、土坑1などがある。三条大路南側溝は、調査区の北端部で、延長約6mにわたって確認されたもので、本調査地のすぐ北で調査された左京第119次調査時に確認されている北側溝との間に想定される三条大路の幅員は、約9m前後(小路相当幅)となることが追認された。建物は、南北2間・東西3間以上のものと南北2間・東西2間以上のものが各1棟あり、両建物の間に浅い溝状の落ち込み(溝状遺構)が南北方向にのびる。

出土遺物には、須恵器・土師器・木製品(斎串、曲物等)・土製品(ふいご羽口)などがある。土器類の中で、漆の付着したものの占める割合が高いのが特徴である。「田中」と判読できる墨書土器も見られる。

右京第300次

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

勝龍寺城跡の本丸・沼田丸を対象とする発掘調査である。現在までの調査で、勝龍寺城に関係する堀、石垣、井戸などの諸遺構のほか、古墳時代以降現代に至る各時代の多様な遺物が見いだされている。なお、調査地は長岡京の右京七条一坊推定地にあつているが、現在のところ長岡京併行期の瓦・須恵器類が採取されている程度で、関連遺構は検出されていない。

右京第314次 (13)

(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は、五条大路・右京五条二坊四町・右京六条二坊一町推定地にあたる。五条大路をはさんで、掘立柱建物跡14棟のほか井戸・土坑などの長岡京に関係する遺構が検出されている。

五条大路は、北側溝のみかろうじて遺存していたが、宅地内で確認された側溝に付属すると思われる塀跡の心線で求めた五条大路の幅員は12m前後となることが確認された。ところが、本調査

地の西方約250m地点で行われた右京第96次調査で確認された五条大路南北両側溝の心間距離は約15mあり、わずか250mの間で著しい違いが生じている可能性が強くなった。今後検討を要する調査課題といえよう。井戸跡1基は、五条大路の北側の五条二坊四町の宅地内で検出された方形縦板組のもので、内部から人物像を墨書した木製品1点が見いだされた。人形の一種と思われるが、極めて珍しいものである。 (奥村清一郎)

センターの動向(63. 8~10)

1. できごと
8. 1 長岡京跡左京第202次(向日市)発掘調査開始
8. 2 京都府教育委員会産業医今井節朗医師職場巡視
8. 3 栃木県文化振興事業団来所
8. 4 堤谷古墳群(久美浜町)発掘調査開始
8. 5 樋口隆康副理事長, 私市円山古墳(綾部市)発掘調査現場視察
8. 10 鳥取城跡(久美浜町)発掘調査関係者説明会実施, 発掘調査終了(4. 21~) 平安京跡(京都府庁舎)発掘調査終了(4. 6~) 木津遺跡(木津町)発掘調査開始
8. 12 下畑遺跡(野田川町)発掘調査終了(7. 25~)
8. 17 小田垣内遺跡(田辺町)発掘調査開始
8. 19 中谷次長・杉原調査第2課長, 私市円山古墳の発掘調査状況を文化庁へ報告
8. 22 文化庁山崎信二文化財調査官, 私市円山古墳発掘調査現場視察 佐原 真・原口正三両理事, 私市円山古墳発掘調査現場視察
8. 23 「第7回小さな展覧会」開会 関係役員協議会開催一於・当調査研究センター—福山敏男理事長, 荒木昭太郎常務理事, 中沢圭二・川上 貢・藤井 学・足利健亮・佐原 真・原口正三・堤圭三郎の各理事出席
8. 24 長岡京連絡協議会開催
8. 27 中沢圭二理事, 私市円山古墳発掘調査現場視察 第47回研修会開催(別掲)
8. 29 京滋バイパス開通式出席(荒木事務局長・中谷次長)
8. 30 福垣北古墳群(綾部市)発掘調査終了(4. 18~)
8. 31 赤田城館跡(綾部市)発掘調査終了(5. 19~)
9. 2 文化庁須田勉文化財調査官来所
9. 4 「第7回小さな展覧会」閉会
9. 6 京都府教育委員会武田 浩教育次長・上田 将指導部長・堤 圭三郎文化財保護課長, 私市円山古墳視察
9. 9 休場古墳(野田川町)発掘調査現地説明会実施
9. 11 私市円山古墳発掘調査現地説明会実施
9. 12 京都府京都文化博物館竣工式出席(荒木事務局長) 上人ヶ平遺跡(木津町)発掘調査開始
9. 14 休場古墳発掘調査終了(7. 19~)
9. 15 「日本列島発掘展」京都会場開会
9. 19 埼玉県埋蔵文化財調査事業団来所
9. 20 「日本列島発掘展」京都会場閉会
9. 20~22 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(札幌市)出席(中谷次長・安

- 田総務係長・伊野調査員・森調査員)
9. 23 温江遺跡(加悦町)発掘調査開始
第7回講演会開催(別掲)
9. 26 弊羅坂古墳群(木津町)発掘調査終了(6. 29～)
9. 27 長岡京跡左京第202次発掘調査関係者説明会実施
9. 28 福垣北古墳群発掘調査現地説明会実施
赤田城館跡現地説明会実施
長岡京連絡協議会開催
9. 29 木津遺跡発掘調査関係者説明会実施
9. 30 京都府京都文化博物館開館式出席(荒木事務局長・中谷次長)
10. 3 館1号墳(綾部市)発掘調査開始
10. 4 長岡京跡左京第202次発掘調査終了
木津遺跡発掘調査終了
10. 5 京奈バイパス開通式出席(中谷次長・杉原調査第2課長)
10. 8 京都府公館・府民ホール竣工式出席(中谷次長)
10. 20 木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査開始
10. 22 青野西遺跡(綾部市)発掘調査現地

説明会実施

- 青野西遺跡発掘調査終了(5. 20～)
10. 26 長岡京連絡協議会開催
10. 30 第48回研修会開催(別掲)
2. 普及啓発事業
8. 23～9. 4 「第7回小さな展覧会」開催
8. 27 第47回研修会開催—於・向日市市民会館：昭和62年度発掘調査の成果から—石尾政信「長岡京跡右京第285次調査について」、増田孝彦「高山12号墳の調査について」、引原茂治「綾部市栗ヶ丘横穴群の調査について」
9. 15～20 「日本列島発掘展」開催(於・京都大丸)
9. 23 第7回講演会開催—於・京都こども文化会館：縄文時代のくらしと信仰—三好博喜「由良川自然堤防上の縄文遺跡…舞鶴市志高遺跡の調査から…」、森川昌和「鳥浜貝塚をめぐって」、水野正好「縄文人のくらしと信仰」
10. 30 第48回研修会開催—紫香楽宮跡と信楽焼の里をたずねて—(バス研修・講師：鈴木良章氏)

府下報告書等刊行状況一覧(63.1~12)

発掘調査報告書関係

- 『埋蔵文化財発掘調査概報(1988)』 京都府教育委員会 1988.3
『京都府古文書調査報告書丹後国与謝郡宮津元結屋三上家古文書目録』 同上 1988.3
『福井家旧蔵京枅座関係資料調査報告書』 京都市文化観光局 1988.3
『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第22集 向日市教育委員会 1988.3
『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第23集 同上 1988.3
『長岡京市文化財調査報告書』 第20冊 長岡京市教育委員会 1988.3
『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第11集 宇治市教育委員会 1988.3
『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第18集 城陽市教育委員会 1988.3
『美濃山麩寺下層遺跡発掘調査概報』 八幡市教育委員会 1988.3
『南山遺跡調査概報』 同上 1988.3
『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』 第5集 山城町教育委員会 1988.3
『亀岡市文化財調査報告書』 第19集 亀岡市教育委員会 1988.3
『亀岡市文化財調査報告書』 第20集 同上 1988.3
『福知山市文化財調査報告書』 第13集 福知山市教育委員会 1988.3
『宮津市文化財調査報告書』 第15集 宮津市教育委員会 1988.3
『須代遺跡第一次発掘調査概要』 加悦町教育委員会 1988.3
『日吉ダム水没地区文化財調査報告書』 日吉町 1988.3
『京都府野田川町文化財調査報告』 第2集 野田川町教育委員会 1988.3
『岩滝町文化財調査報告』 第11集 岩滝町教育委員会 1988.3
『京都府弥栄町文化財調査報告』 第5集 弥栄町教育委員会 1988.3
『京都府久美浜町文化財調査報告』 第10集 久美浜町教育委員会 1988.3
『公家屋敷二条家東辺地点の調査』 同志社資料館収蔵庫 1988.3
『大本山相国寺境内の発掘調査』 同上 1988.3

当調査研究センター現地説明会・中間報告資料

現地説明会

- 『三宅遺跡』(京埋セ現地説明会資料 No.88-01) 1988.1.30
『千代川遺跡第13次』(同 No.88-02) 1988.2.13

- 「青野遺跡」(同 No.88-03) 1988.2.20
「長岡京跡左京第285次」(同 No.88-04) 1988.2.20
「長岡宮跡第205次」(同 No.88-05) 1988.6.11
「スクモ塚古墳群」(同 No.88-06) 1988.6.17
「平安京左京」(同 No.88-07) 1988.7.16
「休場古墳」(同 No.88-08) 1988.9.9
「私市円山古墳」(同 No.88-09) 1988.9.11
「福垣北古墳群」(同 No.88-10) 1988.9.28
「青野西遺跡」(同 No.88-11) 1988.10.22

中間報告

- 「蒲生遺跡」(京埋セ中間報告資料 No.88-01) 1988.2.4
「桑飼上遺跡」(同 No.88-02) 1988.2.10
「平安京左京」(同 No.88-03) 1988.3.14
「平安京左京」(同 No.88-04) 1988.5.16
「アサバラ遺跡」(同 No.88-05) 1988.7.20
「長岡京跡右京第306次」(同 No.88-06) 1988.7.21
「鳥取城跡」(同 No.88-07) 1988.8.10
「長岡京跡左京第202次」(同 No.88-08) 1988.9.27
「木津遺跡第6次」(同 No.88-09) 1988.9.29
「赤田城館跡」(同 No.88-10) 1988.9.28
「福垣城館跡」(同 No.88-11) 1988.9.28

府下現地説明会資料

- 「昭和62年度恭仁宮跡」京都府教育委員会 1988.1.23
「崩谷3・4号墳」同上 1988.6.4
「八坂神社西古墳」同上 1988.8.6
「長岡京跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988.2.28
「平安京左京四条三坊九町(藤原実能邸跡)」同上 1988.2.28
「平安京右京六条一坊五町」同上 1988.3.21
「幡枝古墳群」同上 1988.10.2
「平安京西寺跡」同上 1988.11.13

- 「長岡京跡左京第196次」 (財)向日市埋蔵文化財センター 1988. 7. 30
「長岡京跡右京第279次」 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1988. 1. 17
「長岡京跡右京第279次」 同上 1988. 3. 21 1988. 11. 12
「京都大学本部構内の遺跡—京都大学AW27区—」 京都大学構内遺跡調査会 1988.3.14
「二子塚古墳」 宇治市教育委員会 1988. 2. 27
「医王谷1号墳・4号墳」 亀岡市教育委員会 1988. 8. 17
「青野西遺跡」 綾部市教育委員会 1988. 10. 1

その他の雑誌・報告・論文等

- 『京都府埋蔵文化財情報』 第27号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988. 3
『京都府埋蔵文化財情報』 第28号 同上 1988. 3
『京都府埋蔵文化財情報』 第29号 同上 1988. 9
『京都府埋蔵文化財情報』 第30号 同上 1988. 12
『京都府遺跡調査概報』 第27冊 同上 1988. 3
『京都府遺跡調査概報』 第28冊 同上 1988. 3
『京都府遺跡調査概報』 第29冊 同上 1988. 3
『京都府遺跡調査概報』 第30冊 同上 1988. 3
『京都府遺跡調査概報』 第31冊 同上 1988. 12
『京都府遺跡調査報告書』 第9冊 同上 1988. 3
『京都府遺跡調査報告書』 第10冊 同上 1988. 3
『5年のあゆみ 1981▶1986』 同上 1988. 3
『考古展 第7回小さな展覧会』 同上 1988. 8
『京都府遺跡地図第1分冊(第2版)』 京都府教育委員会 1988. 3
『京都市の文化財』 京都市文化観光局 1988. 3
『京都市文化財ボックス』 第3集 同上 1988. 3
『京都市文化財だより』 第9号 1988. 6
『向日市史・史料編』 向日市 1988. 3
『長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和61年度』 (財)長岡京市埋蔵文化財センター
1988. 3
『宇治田原町史』 資料篇第6集 宇治田原町教育委員会 1988. 2
『宇治田原町史』 資料篇第7集 同上 1988. 3
『宇治田原町史』 第2巻 同上 1988. 3

- 『加茂町史 第1巻 古代・中世編』 加茂町 1988. 3
- 『舞鶴市史・現代編』 舞鶴市 1988. 3
- 『大宮町の文化財』 大宮町教育委員会 1988. 3
- 『丹後郷土資料館だより』 第15号 京都府立丹後郷土資料館 1988. 3
- 『鍛冶屋と鋳物師』 同上 1988. 4
- 『丹後国一宮 籠神社の秘宝(特別陳列図録23)』 同上 1988. 7
- 『禅刹 丹波・丹後—その歴史と美術—(特別展図録19)』 同上 1988. 10
- 『山城郷土資料館だより』 第8号 京都府立山城郷土資料館 1988. 3
- 『山城郷土資料館だより』 第9号 同上 1988. 9
- 『企画展資料9 ふるさとの職人』 同上 1988. 4
- 『発掘成果速報—昭和62年度の調査から—』 同上 1988. 9
- 『京都府資料目録追録』 No. 4 京都府立総合資料館 1988. 3
- 『資料館紀要』 第16号 同上 1988. 3
- 『総合資料館だより』 No. 74~75 同上 1988. 1~4
- 『昭和61年度 京都国立博物館年報』 京都国立博物館 1988. 3
- 『平安宮豊楽殿 特別展図録』 京都市考古資料館 1988. 3
- 『研究紀要』 第3号 向日市文化資料館 1988. 3
- 『宇治の文華—雅びと寂び—』 宇治市歴史資料館 1988. 3
- 『第3回企画展 発掘調査から学ぶ』 亀岡市文化資料館 1988. 4
- 『第5回企画展示図録 遊び』 同上 1988. 5
- 『第6回企画展示図録 刀・剣—まつりと信仰—』 同上 1988. 9
- 『天寧寺と金山氏』 福知山市郷土資料館 1988. 10
- 『舞鶴のあゆみ〜ふるさとの歴史を語る文化財〜』 舞鶴市郷土資料館 1988. 6
- 『樂焼の祖・長次郎四百年記念 長次郎』 樂美術館 1988. 10
- 『郷土資料目録』 宮津市立図書館 1988. 3
- 『昭和63年度要覧 乙訓』 京都府乙訓教育局 1988. 9
- 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』 1988. 3
- 『同志社大学考古学シリーズⅣ 考古学と技術』 同志社大学考古学シリーズ刊行会
1988. 10
- 『史想』 第21号 京都教育大学考古学研究会 1988. 3
- 『文化財報』 No.60~61 (財)京都府文化財保護基金 1988. 2~5
- 『会報』 第64号 (財)京都市古文化保存協会 1988. 1

- 『古代文化』 第348～358号 (財)古代學協會 1988. 1～11
- 『土車』 第45～47号 同上 1988. 1～7
- 『京都考古』 第48～50号 京都考古刊行会 1988. 2～5
- 『志くれてい』 第25号 (財)冷泉家時雨亭文庫 1988. 6
- 『伏見くれたけの里』 (財)伏見信用地域協力基金・伏見信用金庫 1988. 5
- 『波布理曾能』 第5号 精華町の自然と歴史を学ぶ会 1988. 3
- 『口丹波史料(三)』 口丹波史談会 1988. 1
- 『郷土久美浜第5号—第1・2・3合併, 改訂第2版—』 久美浜町郷土研究会 1988. 3
- 『室町時代の建築 附 著作目録』 川上 貢 1988. 6

受贈図書一覧(63. 7. 16~10. 15)

- | | |
|----------------------------------|--|
| (財)北海道埋蔵文化財センター
苫小牧市埋蔵文化財センター | (財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第44~52集
とまこまい埋文だより No. 14, 弁天貝塚Ⅱ~幕末期以降に於ける
アイヌ貝塚の発掘調査報告書~ |
| (財)岩手県文化振興事業団埋蔵
文化財センター | わらびて No. 41, 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告
書 第123~124集, 考古遺物資料集 第8集, 甕る埋蔵文化財 |
| (財)いわき市教育文化事業団 | いわき市埋蔵文化財調査報告 第20~21冊 |
| (財)栃木県文化振興事業団 | 栃木県文化振興事業団年報 昭和62年度 |
| (財)群馬県埋蔵文化財調査事業
団 | 上野国分僧寺・尼寺中間地域(2), 鳥羽遺跡 I・J・K区, 勝保沢中
ノ山遺跡 I, 深沢遺跡・前田原遺跡一上越新幹線関係埋蔵文化財発
掘調査報告 第10集, 古代東国の王者一三ツ寺居館とその時代一 |
| (財)山武郡南部地区文化財セン
ター | (財)山武郡南部地区文化財センター年報 No. 3 |
| (財)埼玉県埋蔵文化財調査事業
団 | 研究紀要 第4号, 埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報 8, 埼玉県埋
蔵文化財調査事業団報告書 第59・68~72集 |
| 福井県教育庁埋蔵文化財調査セ
ンター | 福井県教育庁埋蔵文化財調査センター所報 2, 福井県埋蔵文化財調
査報告 第13集 |
| 山梨県埋蔵文化財センター | 研究紀要 4, 年報 2~4, 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書
第23・26~27・32~33・35~36・38集 |
| 佐久埋蔵文化財調査センター | 佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書 第13集 |
| (財)滋賀県文化財保護協会 | 文化財教室シリーズ[97], 滋賀文化財だより No. 128, 紀要 第1
号 |
| 滋賀県埋蔵文化財センター | 滋賀埋文ニュース 第102号 |
| 守山市立埋蔵文化財センター | 守山市文化財調査報告書 第24冊, 川田の歴史一川田遺跡調査の概
要一 |
| (財)大阪府埋蔵文化財協会 | 展示「山直郷とその周辺」, 第3回 泉州の遺跡~昭和62年度発掘調
査成果展~, 弥生・古墳時代の大陸系土器の諸問題 第I~III分冊,
(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第7~8・10~14輯 |
| (財)東大阪市文化財協会 | 東大阪市文化財協会ニュース No. 4, 神並遺跡Ⅱ, 若江遺跡第27次
発掘調査報告 |
| (財)枚方市文化財研究調査会 | 枚方市文化財年報Ⅷ |
| 奈良国立文化財研究所 | 奈良国立文化財研究所年報 1987, 古代稲作農耕の学際的研究 |
| 奈良県立橿原考古学研究所 | 能峠遺跡群Ⅱ(北山・西山・前山編), 野山遺跡群Ⅰ |
| (財)広島県埋蔵文化財センター | 年報Ⅲ 昭和61年度, 広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書 第
66~73集, 賀茂学園都市開発整備事業地(西高屋地区)内遺跡群Ⅲ |

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

(財)北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査センター

小郡市埋蔵文化財センター

平賀町教育委員会

米沢市教育委員会

川崎市教育委員会

小矢部市教育委員会

小松市教育委員会

三方町教育委員会

八代町教育委員会

長野市教育委員会

菊川町教育委員会

磐田市教育委員会

愛知県教育委員会

稲沢市教育委員会

三重県教育委員会

安濃町教育委員会

愛知川町教育委員会

日野町教育委員会

吹田市教育委員会

泉南市教育委員会

羽曳野市教育委員会

豊中市教育委員会

神戸市教育委員会

芦屋市教育委員会

伊丹市教育委員会

新宮町教育委員会

大和郡山市教育委員会

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所年報 1986

研究紀要 第2号, 埋蔵文化財調査室年報4 昭和61年度, 北九州市埋蔵文化財調査報告書 第66~73・75集

小郡市文化財調査報告書 第6・41~47・49集

旧大光寺城(2)遺跡発掘調査報告書

米沢市埋蔵文化財報告書 第24集

川崎の遺跡, 川崎市文化財調査集録 第23集

小矢部市埋蔵文化財調査報告書 第23冊

念仏林遺跡 小松短期大学建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

三方町文化財調査報告 第6集

馬見塚遺跡一県営笛吹川沿岸土地改良事業農道拡幅等に伴う発掘調査報告書一

長野市の埋蔵文化財 第26~27・29~31集

菊川町埋蔵文化財報告書 第10・12~14集

昭和62年度 遠江国分寺跡周辺国分寺・国府台遺跡発掘調査報告書

昭和62年度 坂上遺跡・藤上原3遺跡発掘調査報告書

愛知県古窯跡群分布調査報告VI 常滑古窯跡群

塔の越遺跡発掘調査報告書(II), 尾張国府跡発掘調査報告書(X), 下津城跡発掘調査報告書(IV)

三重県埋文調査情報 No. 12・14, 三重県埋蔵文化財調査報告 26

安濃町埋蔵文化財発掘調査報告 第3集

愛知川町埋蔵文化財概要報告書 第4集

日野町埋蔵文化財発掘調査報告書 第3~5集

吹田市文化財ニュース No. 9, 昭和62年度 埋蔵文化財緊急発掘調査概報 吉志部瓦窯跡・垂水遺跡

泉南市文化財調査報告書 第15集

羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 16

豊中市文化財調査報告 第21・23~26集

繁田古窯址発掘調査報告書

芦屋市文化財調査報告 第16集

緑ヶ丘遺跡第3次調査報告書, 伊丹市口酒井遺跡一第11次発掘調査報告書一

新宮町文化財調査報告10 城山城

大和郡山市文化財調査概要 9~11

橋本市教育委員会	橋本市遺跡調査概報 第1輯
倉吉市教育委員会	大沢前遺跡発掘調査報告書, 倉吉市内遺跡分布調査報告書Ⅲ, 東山田1号墳発掘調査報告書, 郊家平古墳発掘調査報告書, 立縫遺跡群Ⅲ 大山遺跡発掘調査報告書, 倭文遺跡群発掘調査報告書Ⅱ, 中国電力八橋線鉄塔建設予定地内発掘調査報告書, 耳古墳群発掘調査報告書, 史跡 大原廃寺第2次発掘調査概報, 四王寺地区ほ場整備事業に伴う四王寺遺跡群 西前遺跡発掘調査報告書
玉湯町教育委員会	史跡出雲玉作跡玉ノ宮地区一第1次・2次発掘調査概報一
吉田町教育委員会	史跡毛利氏城跡(郡山城跡・多治比猿掛城跡)保存管理計画策定報告書
今治市教育委員会	今治市埋蔵文化財調査報告書 第11集
佐賀県教育委員会	九州横断自動車道関保埋蔵文化財発掘調査報告書8, 九州横断自動車道関保埋蔵文化財発掘調査概報 第10集
三重町教育委員会	陣箱遺跡 大分県大野郡三重町所在の弥生時代後期住居跡の調査
朝地町教育委員会	朝地地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ
石垣市教育委員会	大田原遺跡発掘調査報告書, 崎枝赤崎貝塚発掘調査報告書, ビロースク遺跡 沖縄県石垣市新川ビロースク遺跡発掘調査報告書
釧路市立博物館	第23回釧路市立博物館特別展 湖州鏡と古鏡展, 釧路市立博物館紀要 第11~13輯, 釧路市立博物館収蔵史料目録(Ⅵ)~(Ⅶ)
北上市立博物館	北上川流域の自然と文化シリーズ(10) 日高見のみつり
秋田県立博物館	博物館ニュース No. 71, 秋田県立博物館館報 昭和62年度
国立歴史民俗博物館	歴博 第30号
市立市川考古博物館	市立市川考古博物館図録15, 昭和61年度 市立市川考古博物館年報 No. 15, 市立市川考古博物館研究調査報告 第4冊
成田山霊光館	なりた No. 43
東京国立博物館	東京国立博物館図版目録・古墳遺物篇(近畿Ⅰ)
調布市郷土博物館	調布市郷土博物館だより No. 28~29, 絵馬展 祈りとかたち
出光美術館	出光美術館館報 第61号
上越市立総合博物館	スキー発祥 思い出アルバム
石川県立歴史博物館	石川れきはく 第8号, 石川県立歴史博物館紀要 第1号, 一向一揆
小松市立博物館	小松市立博物館だより 第38号
福井県立朝倉氏遺跡資料館	朝倉氏遺跡資料館紀要1987, 特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡XIX一昭和62年度発掘調査整備事業概報一
三方町郷土資料館	湖の漁具展, ふるさとのあけぼの展一土からよみがえった三方の古代一

井戸尻考古資料館	唐渡宮 八ヶ岳南麓における曾利文化期の遺跡群発掘報告
沼津市歴史民俗資料館	沼津市歴史民俗資料館だより (80)~(81)
	沼津市歴史民俗資料館資料集 4・6
名古屋市博物館	名古屋市博物館年報 No. 11(昭和62年度), 研究紀要 第11巻
大東市歴史民俗資料館	大東市埋蔵文化財調査報告 第1集
兵庫県立歴史博物館	総合調査報告書Ⅲ 書写山円教寺
神戸市立博物館	博物館だより No. 25
西宮市立郷土資料館	西宮市立郷土資料館第3回特別展示図録 道・旅・宿場
淡路市立淡路文化史料館	おいでてはいりょ見てはいりょ一城下町洲本展一
島根県立八雲立つ風土記の丘	八雲立つ風土記の丘 No. 90~91
(財)日本はきもの博物館	日本はきもの博物館だより 32
九州歴史資料館	九州歴史資料館年報(昭和62年度), 九州歴史資料館研究論集13
福岡市立歴史資料館	特別展図録「古代の船—いま甦る海へのメッセージ—」
北九州市立考古博物館	北九州の中国陶磁—出土品にみる古代の日中交流—
	歴史人類 第16号
筑波大学歴史・人類学系	
国土館大学文学部考古学研究室	考古学研究室報告甲種 第2~4冊
法政大学多摩校地遺跡調査団	法政大学多摩校地遺跡群Ⅲ—C・R地区—
国際基督教大学考古学研究センター	向ノ原遺跡, 日性寺遺跡B地点
大手前女子学園考古資料室	大坂城三の丸跡の調査Ⅲ 大手口における発掘調査報告書(その2)
大手前女子大学史学研究所	旧伊勢神戸藩主本多家資料
島根大学附属図書館	山陰地域研究 第4号
九州大学九州文化史研究施設	九州文化史研究所紀要 第33号 考古学関係抜刷集
文化庁	全国遺跡地図佐賀県
国立国会図書館	日本全国書誌 No. 1, 661
日本窯業史研究所	日本窯業史研究所 第4・6・8・10~11・13~23冊, 古代窯業の実験研究(1), 栃木県小川町浄法寺遺跡発掘調査概報
鶴川第二地区遺跡調査会	真光寺・広袴遺跡群Ⅱ
本郷遺跡調査団	海老名本郷Ⅱ, 同Ⅳ, 同Ⅴ
(株)名著出版	歴史手帖 第178~180号
(株)ジャパン通信社	文化財発掘出土情報 第68号
(財)山梨文化財研究所	宮間田遺跡発掘調査報告書
(財)古代学協会	古代文化 第355~357号, 平安京跡研究調査報告 第18輯
(財)冷泉家時雨亭文庫	志くれてい 第25号
奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部	飛鳥・藤原宮発掘調査概報18

埋蔵文化財天理教調査団	考古学調査研究中間報告 13～14
朝鮮学会	朝鮮学報 第127輯
埋蔵文化財研究会第24回研究集会	第24回埋蔵文化財研究集会 定型化する古墳以前の墓制 第Ⅰ～Ⅲ分冊
(財)長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財センター年報 昭和61年度
京都府教育委員会	京都府古文書調査報告書 丹後国与謝郡宮津元結屋三上家古文書目録, 重要文化財本願寺本堂(阿弥陀堂)修理工事報告書, 重要文化財清水寺三重塔修理工事報告書, 重要文化財壬生寺大念仏堂(狂言舞台)附道具蔵脇門土塀修理工事報告書
弥栄町教育委員会	京都府弥栄町文化財調査報告 第5集
久美浜町教育委員会	畑大塚古墳群(京都府久美浜町文化財調査報告 第10集)
野田川町教育委員会	寺岡遺跡(京都府野田川町文化財調査報告 第2集)
宮津市教育委員会	小田古墳発掘調査概要(宮津市文化財調査報告 第15集)
舞鶴市	舞鶴市史・現代編
日吉町	日吉ダム水没地区文化財調査報告書
亀岡市教育委員会	亀岡市文化財調査報告書 第19～20集
向日市教育委員会	向日市埋蔵文化財調査報告書 第22集
長岡京市教育委員会	長岡京市文化財調査報告書 第20冊
宇治市教育委員会	宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第11集
宇治田原町教育委員会	宇治田原町史 第2巻
加茂町	加茂町史 第1巻(古代・中世編)
京都府立丹後郷土資料館	丹後郷土資料館友の会ニュース No. 29, 禪刹 丹波・丹後—その歴史と美術—(特別展図録19)
京都府立山城郷土資料館	京都府立山城郷土資料館だより 第9号, 企画展資料9 発掘成果速報—昭和62年度の調査から
福知山市郷土資料館	天寧寺と金山氏
亀岡市文化資料館	第6回企画展示図録「刀・剣—まつりと信仰—」
宇治市歴史資料館	宇治の文華—雅びと寂び—
樂美術館	樂焼の祖・長次郎四百年忌記念 長次郎
京都府乙訓教育局	昭和63年度要覧 乙訓
久美浜町郷土研究会	郷土久美浜 第5号—第1・2・3合併改訂 第2版—
川上 貢	室町時代の建築 附著作目録
小山 雅人	季刊 邪馬台国 第32号(昭和62年夏号)
高井 悌三郎	摂津旧清遺跡<宝塚市文化財調査報告 第5集>

福 田 惇
水 野 正 好
吉 田 金 彦

大和を掘る 1987年度発掘調査速報展Ⅶ
奈良大学平城京発掘調査報告書 第1集
京都滋賀 古代地名を歩く

—編集後記—

年末になり、何かとあわただしくなりましたが、情報30号が完成しましたのでお届けします。

本号で発刊以来30号となって一区切りがついたこともあり、今号では当調査研究センターが調査したものでまとめてみました。平安京の調査では、本文中にもあるように、古代から現代に至るまでの生活の痕跡があり、内容的に興味深いものになっています。休場古墳と私市円山古墳は、後期古墳・中期古墳の例で、本年度前半期の調査の中でも成果のあがったものでした。よろしく御味読下さい。

なお、昭和62年度に当調査研究センターと京都府教育委員会とが主催しました特別講演会「広峯古墳と景初四年銘鏡」の講演内容が、来春4月に榊同朋舎出版から「謎の鏡—卑弥呼の鏡と景初四年銘鏡—」として刊行されることになりました。御期待下さい。

(土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第30号

昭和63年12月26日

発行 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
☎ (075)933-3877 (代)

印刷 中 西 印 刷 株 式 会 社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
☎ (075)441-3155 (代)